
IS 天才以上完璧未満

狂雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 天才以上完璧未満

【Nコード】

N8119W

【作者名】

狂雲

【あらすじ】

ドイツで完璧として存在するために造られた人間リョーマ・ボーデヴィツヒ。

しかし彼は人間として必要な感情と味覚がなかった……。それでもすべてにおいて天才と呼ばれ軍に入りさまざまな訓練を義妹のラウラ・ボーデヴィツヒと共に受けてきた。感情の無い彼は道具として使われることにも疑問をもたずただ無表情に生きてきた。

篠ノ之束がISを作り世の中に送り出すまでは。

世界でたった二人の男のIS操縦者として女しかないIS学園に
きた一夏とリョーマ。
ハーレムを築いてく一夏の横でそれを眺めているリョーマの若干苦
労するものがたりである。

プロローグらしきもの（前書き）

つい勢いで描いてしまったがこれ・・・大丈夫か？

なんとなくラウラに兄がいたら？と思って書いてしまった。

原作ブレイク？してますよそりゃ

主人公超チートですし

それでもいい人は見てください

ブローグらしきもの

ドイツのとある研究所内で……

『博士!!!人工授精が成功しました!!!』

『よし、あとは経過観察と我が子のほうの実験だけか』

大きなビーカーのようなもの……人工子宮の前に博士と呼ばれた
まだ20代後半の人と研究員であろう20代前半の人が話をしている。

『はい、人工の精子と卵子ではなく博士たちの精子と卵子なのでこ
れよりは楽に成功すると思いますが……』

『たしかにそうだが失敗する可能性も零ではないのだ。気は引き締
めなければならん。』

『……そうですね、失礼しました。』

『これにも名前をつけねばならんな、……ふむ』

『あ〜』

『むっ、どうした』

『この名前は、わたしがつけていいでしょうか?!』

『ほう?どうしてかな……』

『あ……。これを作るといった時から名前を付けるなら自分が
つけたいな〜と……』

『なるほどな……。いいぞ、姓はボーデヴィツヒで決定してるか
らな』

『わかっていますよ。……リョーマというのはどうでしょうか?』

『君が一番好きな偉人の名前か……。しかしドイツ人である君が
一番好きな偉人が日本人とはね』

『わるいですかね?一番好きな偉人が日本人というのは?』

『いや、それは君の問題だからいいだろう。……ふむ、リョーマ・
ボーデヴィツヒか。それで決定しよう。』

『ありがとうございます!!』

『次の子はもう私たちが決めてあるからな。べつにかまわない』

『たしか・・・ラウラでしたっけ?』

『ああ、そうだ。これ・・・嫌リヨーマの義妹になるな』

博士はどこか嬉しそうにそういった。

研究所の奥から研究員が一人走ってきた。

『すいません少しいいですか。博士』

『むっ、どうした?』

『博士の奥方の体調がすぐれないようで・・・』

『分かったすぐに行く。ではここはまかせたよ。』

『わかりました。奥さんを大切に。』

『君に言われるまでもない』

そう言つて博士は奥から来た研究員といっしょに足早に去って行った。

『・・・この子は完璧として生まれるのか、それとも・・・』

一人の研究員の小さなひとりごとがただ研究所内に消えて行った。

これがいまから十六年前のできごとである。

ブローグらしきもの（後書き）

さてさてこれを読んでくれる人がいるのだろうか？

いたら乾燥・・じゃなくって感想をくれたらうれしいです。

ちなみに福音戦までしかしません

小説買ってないから。

いつか買うと思うんでしたらこの続きでもかくかな？

呼んでくれた人がいたなら

プロローグらしきもの2(前書き)

まだ原作にはいきません

これが処女作なんです

いろいろとわからんですよ

それではどうぞ

プロローグらしきもの2

大分前の話をしよう。

あれは、10年前で俺・・・リョーマとラウラがまだ6歳と5歳だったころの話だ。

俺たちは遺伝子強化という実験の成功者たちだった。

なぜそんな実験をしたかまでは俺にはわからない。わかるのはその実験がとても難しいこととそのため何人も犠牲があったことぐらいだ。

だがはつきり言って成功例である俺たちにはその実験にケチをつけることはできなかつた。もつともケチをつける必要もないが。

俺はラウラより早く生まれたためにラウラより早く誕生日を迎える、まあラウラの義兄だから当然なんだが・・・ラウラは俺の事を本当の兄と思っているようでも「兄上」と呼んでくる。

普通ならばそんな義妹を可愛く思うのだろうな、義父も義母も頬を綻ばせているからな。

だがおれには、そんなことを思うことはできない。怒ることも喜ぶことも悲しむこともすべての感情が俺にはない。さらに味を感じることも出来ない。

べつにそれを苦に思ったことはない。義父たちには申し訳ないような顔をされたが別に気にしていないから問題ないのだが・・・。

義父たちは優しすぎる。上の命令で仕方なしに実験していたとはいえやはり自分の子まで研究に使うのは相当抵抗があったようだからな。

だが、上の連中はすぐに義父たちから俺たちを奪った。

俺たちは軍に入れさせられさまざまな訓練をつけた。まだ2、3歳の俺たちをだ。

だが、俺たちは遺伝子を強化された存在着々と力をつけていった。

だが俺たちのそんな日々はそう、俺が6歳、ラウラが5歳のときにある事件によって崩れていった。義父たちにとっては嬉しいような虚しいような崩れ方だったが。

その事件が起こる少し前俺とラウラは模擬戦をしていた。

リ『ラウラ、お前の動きは単調すぎる。その行動をするならもっと速さをつける』

ラ『くっ！わかりました、兄上。いきます！！』

ラウラが地面をける。今互いにナイフ一本で戦っている。

ラウラには悪いが戦闘においておれの右に出るやつはおそらくこの世界にはいないだろう。

ラウラは様々なフェイントをかけるがまだ未熟すぎる。もっとも5歳がこれだけの動きが出来る方がおかしいがな。俺の事はおいてリ『まだぬるいな。』

ラ『あっ！』

俺はラウラのナイフをはじいたその時にラウラが持ってたナイフは折れたようだがまあいいだろう

リ『・・・今日はこれで終わりだな・・・。』

ラ『ありがとうございました。！！兄上』

リ『いつもの事だ。礼を言われることではない。』

ラウラがさらに何かを言おうとしたが急に俺たちに召集の放送がかかる。

リ『行くぞ、ラウラ』

ラ『はい！』

この時はまだ知らなかったあの事件が起こることを・・・

軍のお偉いさんのところに行くと義父たちもいた。

リ『失礼します。リヨーマ中尉です。』

ラ『失礼します。ラウラ少尉です。』

俺たちがそう挨拶をするとお偉いさんがこちらを向いて話しかけてきた。

『うむ、よく来てくれた。話というのはだな。・・・この事なのだ。』

そう言つてモニターを指した。

そこにはウサ耳のカチューシャをつけた女性（中学2、3年だろうか）がなにやら物騒なロボットのようなものの説明をしている。

リ『これは、何ですか』

『篠ノ之束という少女が自分で作ったと言っているIS、インフィニット・ストラトスというらしい。』

だが、あまりにもばかしくてな。こんな少女が宇宙空間での活動を目標にしたマルチフォーム・スーツを作れるわけがないと・・・、どうした？リヨーマ？随分固い顔をして？』

リ『こんなものをこの人が作ったのですか・・・。これはすごいぜひ彼女を優遇すべきですね。』

敵に回したらこの上なくおそろしいでしょう』

おれはこの時でも無表情だった。

だが、普段から天才と呼ばれていた俺がこんなことを言ったのだからお偉いさんはとても驚いでいた。

『それほどのものなのか？これは、とても信じられんが』

リ『世界もその反応をするでしょうが、我々は彼女を支援すべきです。ですがまだです。』

『まだ？』

お偉いさんも義父たちもラウラも不思議そうな顔をしていた

リ『はい、まだです。世界がこのISを認めないなら彼女は無理やりにも世界に認めさせようとするでしょう。ハッキングでもどんな手をつかってでも。なので今はまだ支援をするべきではない、で

すが協力的な姿勢を見せておけばどの世界よりも我々がISに対して一歩有利に立てるでしょう。』

『ふむ、リヨーマにそこまで言わせるか。ならその意見を使わせてもらおう。すぐに彼女に会ってくれないか？リヨーマ、ラウラ？』
リ、ラ『はっ。了解です』

俺たちは敬礼してその場を後にした。

『ボーデヴィツヒ夫妻』

夫妻『なんででしょうか？』

『感謝と詫びをしなければならんな。実験時につらい思いをさせただろう、申し訳ない。』

そして実験を成功させてくれてありがとう。助かったよ』

夫妻『そんな・・・もったいないお言葉です。』

そんなやり取りがその場で行われていた

リ『ラウラ、準備はいいか』

ラ『問題ないです。兄上』

リ『ではすぐに行くぞ』

ラ『はい！（兄上と二人で遠出とは・・・嬉しいな）』

そうして俺たちはいまだに発表を続けている篠ノ之博士の元に俺が作った自家用ジェット機・・・当時の俺は何がしたくてあれを作ったんだろうか。

ドイツから日本までももの5、6分で着いちゃった。出来心は恐ろしいな。

リ『さて、ついたな』

ラ『うゝ（なぜ、兄上はあれに乗ってきたのに平気なんだ？運転手だからか？とゆうかなぜ操縦できるんだ？）』

リ『ラウラ、大丈夫か』

ラ『あっはい大丈夫です。兄上』

リ『では、行くか』

そうして俺たちは篠ノ之束の元へと歩いて行った

↳篠ノ之束視点↳

あゝあ誰も興味も示さなかったな

まあべつにそれでもいいんだけどねそれならそれで別のやり方があるし

リ『篠ノ之博士ですね』

うん？誰この子達？

リ『俺はドイツ軍所属のリヨーマ・ボーデヴィツヒです』

ラ『同じくドイツ軍所属ラウラ・ボーデヴィツヒです！』

ふゝん、でもこどもだよねこの子等

束『で、君ら何の用？こつちは忙しんだけど』

ぶつきらばつに無関心で無愛想に言う

ラ『なっ』

女の子の方は驚いたような怒った様子で声をあげる

リ『そうですか、ISのことでお話があったのですが』

えっなんだって？

束『ISのことです？』

なんだろう？ってよく考えたらドイツの軍にはいつてる？この子達か？

まあいいやISの事ですって何だろうか？悪口でも言いに来たのかな

リ『はい、貴女が作ったあのISおれは深く気に入りました。ISの存在理由、また、その構造および武器等の技術すべてにおいて既存の科学を超えている』

束『……………』

何だろうかこの子は？誰も共感しなかったISを褒めている？ドイツはなにがしたいのかな？

この子等をつかってこの束さんになにをさせたいのだろう？

リ『我々がしたいのはあなたの支援ですがまだ時期が早い』

束『時期が早い？』

世界が束さんに追いついてないことかな？それをこの子は見ぬいてるのか、それとも軍（上）からの命令でこれをいつてるのかな？

この子は興味もてるな

リ『この世界はあなたを受け入れてはいない。だから、あなたは自分を世界に受け入れさせようとしている。どんな手段をつかってでも。違いますか。』

束『へえそこまで考えてるんだ。それは上（軍）の考え？』

リ『いえ、俺の考えです。上も世界と同じ対応でしたから』

ラ『兄上は天才ですから！！』

女の子が自信満々にそういった

この子は・・・私と同じか

リ『我々ドイツはISの製作に賛成です。なので、少し恩着せがましいのですが』

そう言えばこの子はものすごい無表情だねまるで感情がないようだよ束『何かな？』

リ『世界があなたを受け入れたときISのコアを我らドイツにほかの国より多くもらえないでしょうか。そのかわり我らドイツは全力であなた方をサポートします。』

束『！！なぜあなた方と聞いたのかな？』

ちーちゃんは一切表舞台にでてきてないのに

リ『一人でこんなことをやるのは天才でもいませんよ。あなたには気の許せる仲間がいる、だからこんなことをした違いますか。』

この子はやっぱり天才か・・・。

束『ばれてちゃしょうがないね、条件はそれだけ？』

リ『あといまからISのデータを貰えませんか、俺はあなたほど科学に特化した天才ではないがほかの科学者よりは数段ちがうので』

束『それなら問題ないよ。はいこれ』

と言つて私はデータを渡す。

束『でも悪いことに使つたら容赦なくつぶすよ』

リ『ご安心を、これだけは命令を逆らつても悪用させません。約束ですからね。ありがとうございます。もしあなた方がお困りならぜひ俺に連絡してください。番号はこれですので。』

と云つて少年は紙を渡してきた。

束『わかつたよ。もう一度名前をいつてくれる？』

リ『リヨーマ、リヨーマ・ボーデヴィツヒです』

彼・・・リヨーマは最後まで無表情だった。声にも抑揚がなくまるで機械のようだった。

（リヨーマ視点）

リ、ラ『それでは、失礼します。』

そう言つて俺たちはその場を後にした。

ラ『なんなのでしょうか？博士の最初のあの態度は！』

ラウラ、まだそのことを言つてるのか・・・。

リ『おそらく他人に一切の興味が無いのだろうな。だがおれには興味を持ったようだ。かるく興奮していたようだし。』

おそらく似たような天才に初めて会つたのだろうな篠ノ之博士は

俺の横でラウラはすこし頬を膨らませている・・・拗ねてるのか？

興奮してたとかいつてたからか

俺は無表情なのだから特に意味はないと思わなかつたようだ

ラ『しかし、兄上。なぜデータをもらったのです？ISを貰えばはやかつたのでは？』

機嫌がなおつたな、まあ今手をつないだからだろうけど

リ『博士が事件を起こした後世界がISの危険性に気付く、そしてISを捕獲もしくは破壊をと世界は動き出すだろう。そのときISを持つていたらドイツまで狙われる、だからだ』

ラ『あ、なるほどさすがは兄上』
リ『帰りぐらいゆつくりと帰るか。あれは運転手以外気分が悪くなるから』

ラ『・・・(兄上、もっと早く言って下さい)』
そうしてその日はとても大きな収穫があつて俺たちはドイツに戻った

プロローグらしきもの2（後書き）

ラウラの性格が違う気がするな

そこはまだ5歳児だからと気にしないでください

表では真剣で裏では若干ブラコンってことで

とゆうかこんなに長くする気はなかったんだがな

まだ原作にはいかないっす次もね

次は彼の愛機がでてきます。武器がガンダムネタ満載ですが気にしないでいただきたい

それでは

プロローグらしきもの3 (前書き)

いかんせん!!!

はやく原作にいかんと!!!

でもリョーマの愛機が手に入る話と

第二回モンドグロツソの話しがまだ残っている

はっ!!!プロローグって書かなきゃいいのか

もうわからん

ってなわけで三話目どうぞ

ブローグらしきもの3

さてとあの篠ノ之博士がISを発表してから1か月たったある日のことだ

（リョーマ視点）

リ『よし、ISのデータ全分析終了。さすが篠ノ之博士まさか1か月かかるとは・・・』

しかしIS・・・なぜ女性しか乗れない？ラウラにさらに負担がかかってしまう

とくにこのヴォーダン・オージエ・・・ISの適合性向上のためのものだが不安すぎるな・・・

そこでいきなり俺の携帯が鳴る

リ『ん、だれだ・・・そういえば篠ノ之博士以外に教えてないな。もしもし』

東『早速で悪いんだけど今世界で日本を攻撃できる国にハッキングして日本にミサイル一斉発射させたんだ』

やっぱりそんなことしたのか

リ『それでなぜ電話してきたのです』

相変わらずの無表情で抑揚のない声でいう

東『いや〜りっくんのほうのところにもハッキングしたのに防がれちゃって〜いったいなにしたのさ？』

りっくんで俺の事が

リ『ハッキング対策を万全にしておいただけです。とくにミサイル関係の方を重点的に』

篠ノ之博士ならやりかねんとおもってプロテクトを1000000くらひかけておいて正解だったな

東『まあいいや（リ）いいのか・・・かるいな（）テレビみといて

ね〜それじゃ』

言うだけ言ってきたな。まあいいかテレビをつけるか

〈東視点〉

束『まったく、プロテクト100000枚はないよ。まったく1000枚しか超えられなかったよ』

千冬『お前がハッキング出来ないとはな、お前以上の天災かそいつは？』

字が違うよちーちゃん・・・。

束『そうじゃなくて相当前から準備してたみたい。』

千冬『こうなることを前から知っていたというのか？』

束『そうなるね。なんてったって束さんが認めた天才だからね』

ホントに予想外だよ。まったく。でも2341発もあれば十分かな

束『さあ、ちーちゃん。思いつきりやつちゃってきてよ』

千冬『わかつてる。いつてくるぞ。』

そういつて白騎士はミサイルの群れに飛んで行った。

〈リヨーマ視点〉

ラ『兄上、なにを見てるので？』

ラウラが後ろから声を掛けてきた

リ『世界が篠ノ之博士を受け入れる瞬間だ、お前も見とけ』

ラ『わかりました』

少し不機嫌になりながら横に座ったラウラの頭を撫でてやった

ラ『~~~~~』

機嫌が戻ったな、まったくなんとずるい義兄^{アニキ}んだろっかな。おれは。しかしさすがISいとも簡単にミサイルを落としていくな

そういえばドイツ軍にISの捕獲または撃破命令をだすのやめさせ

ないとな

全てのミサイルが落ちたな

さて篠ノ之博士からISのコアをたくさんもらうために働くとするかドイツのために

そういえばISが発表されてからおれたちは義父たちと過ごす時間がふえたラウラや義父たちは随分幸せそうだ。

さて話が脱線したなまあそんなことしてるうちにお偉いさんの前まで来たが

『ドイツ軍だけISにこうげきするなか……。まあ何の問題もないな。もともとするつもりもなかったからな』

リ『そうでしたか』
心配する必要すらなかったか

そして世界は篠ノ之博士を受け入れた……。世界だけは。

束『さてISのコアをどの国が何個持って帰れるかはここに書いてあるから』

興味がなさそうに篠ノ之博士はそういった

「まってくれ！なんでドイツだけこんなにコアの数がおおいんだ！不公平だぞ」

束『うるさいな、ISを壊そうとした国より攻撃して来なかった国の方を優遇するにきまってるでしょ』

篠ノ之博士は国の代表達に早く消えてもらいたいらしい

「くっ」

それだけ言っと代表達はコアを持って去っていった。

そう篠ノ之博士は世界に受け入れられても人には受け入れられないのだ。

リ『お久しぶりです。篠ノ之博士』

束『おお！リッ君！あいたかったよ。これリッ君の国が持っているコアだよ』

束『あとこれもつけるよ』

束『あとこれもつけるよ』

束『なんだこれは？黒い玉？』

束『これは束さんでもうまく扱えないじゃじゃ馬ISだよ』

束『なんてもの渡してんだこの・・・ひ・・・と？』

束『あれこの子が反応してる？・・・すごいよリッ君！！いままでもうんともすんとも言わなかったのに！！』

束『この球体からISについてのデータがはいってくる』

束『気がつくよ球体がリストバンドになっていた』

束『おお！ISの待機状態の姿が変わるなんて前代未聞だよ』

リ『待機状態？とゆうかななぜ俺の腕についたんですこれ』

束『つまりこの子はリッ君のことが好きになったんだね』

束『なるほどどうやら遺伝子強化の影響かなんかで男の俺でもISが操縦できるようになったのか？』

束『恐ろしいなこれ』

束『名前がリッ君できめてね』

束『名前がリッ君できめてね』。ついでにリッ君が高校生になるまでは隠しておいて上げるよ』

束『それは助かります。ドイツでもそうしておきますか』

束『そうしなければドイツがこまるだろう』

束『それでは失礼します』

束『ええ！もう少しいてよ！リッ君！』

束『ですがおれも忙しいのですいませんが』

束『しょうがないな』

束『しょうがないな』

束『そうしておれはドイツに戻りISの開発および研究に没頭した』

束『ついでに俺もISが起動できるといったらいろいろと大変だった。』

ISを操縦するにあたって耐G訓練と今まで以上の訓練をうけてきた
そして6年がたったとき俺とラウラはヴォーダン・オージエを施さ
れた

俺は両目、ラウラは左目に受けた。

俺は両目とも適合し相変わらず両目とも赤色だったが、ラウラはう
まく適合できずに左が金色になり右目が赤色というオッドアイにな
ってしまった

そのせいでラウラは軍から役立たずと呼ばれる用になってしまった

あの事件が起こるまでは……。

プロローグらしきもの3（後書き）

というわけで彼の愛機が手に入りました

何故彼がISを操縦できるのかそれは結局分からずじまいです

つぎは最後に言ったとおりある事件がおこります

まあ前書きでいっちゃったけど

感想とかくるのかなあ？

それでは

ブローグらしきもの4 (前書き)

よしブローグは今回で終わるぞ・・・たぶん
それではいってみようかな

プロローグらしきもの4

前回はなしたことから1年たったころだ

第二回モンド・グロツソが開催された。

今回はおれも暇だったので見に行くことができた。

前回のモンド・グロツソで総合優勝し「ブリュンヒルデ」と呼ばれた織斑千冬がまた出場してるらしい

彼女は篠ノ之博士が唯一の親友であるあの白騎士事件で白騎士であった。いまは白騎士ではなく暮桜にのっている

この暮桜は白騎士の後継機であるらしい武装は近接用ブレードしかないが、しかしそれだけで前回のモンド・グロツソを勝ち進んだんだからすごいな

まあ俺もできるが

次はいよいよ決勝つとときにいきなり俺の携帯がなった

リ「篠ノ之博士かどうしました」

束「たいへんだよ！たいへんだよ！リツ君！いっくんがいなんだよ！」

リ「落ち着いてください。いっくんとはだれです」

束「いっくんはちーちゃんの弟だよ！そのいっくんがいなんだよ！」

リ「了解した。すぐにこちらで調べる」

束「たのんだよ！リツ君！きみにかかっているよ」

そっいつてきれた。さて

リ「俺だ」

ク「大佐？どうしましたか？」

ドイツにいるラウラの部下であるクラリツサ大尉に連絡する

こいつの情報収集力は目を見張るものがある

リ『篠ノ之博士のご友人である織斑千冬の弟である織斑一夏がいなくなったらしい。至急調べてくれ』

ク『了解しました。すこしお待ちください』

さてすぐに行動できるように外に出ておくか

うん？なぜ外に織斑千冬がいるんだ

千冬『くそっ！一夏！どこにいるんだ！？』

どうやら彼女の耳に一夏がいなかったがしれてしまったようだ

2回連続制覇を弟のためにすてるか・・・？

もしや連続制覇をさせないためにか・・・？

まあ今考えても無駄か

リ『あせるな織斑千冬』

千冬『なんだと・・・！弟がいなくなったのに落ち着いてなどいられるか！！！！』

おっとクラリツサからか

リ『一夏の場所は分かったか』

千冬にも聞こえるようにする

千冬『ナンだと・・・？』

ク『はい。場所はここから5時の方向10キロはなれた青い屋根の倉庫の中です』

リ『わかった。感謝する。だそうだが、千冬さん』

千冬『感謝する』

そういつて千冬さんはISを展開して飛んでいった

そのご誘拐事件はあまり騒がれずに幕を閉じた

（ラウラ視点）

リ『感謝する。』

そういつて兄上は通信をきった。

ラ『クラリツサ』

ク『隊長？どうしましたか？』

ラ『兄上はなぜ連絡を？』

ク『なんでも篠ノ之博士の友人の弟さんが誘拐されたと』

ラ『なるほど』

兄上は約束を守ったとゆうわけか……

兄上……あなたと私では何がちがうのだ？私とあなたは兄妹だ。きょうだいたとえ血が繋がっていなくともたとえ生まれ方がちがくても

なのになぜ？あなたは完璧で私は完璧なのだ？

兄上はヴォーダン・オージエに認められたのに私は認められなかった。

兄上は全てにおいて完璧だ、その強さも姿も、そう全てがだ

兄上は私のことをどう思っているのだろう？出来そこ無いと思っ
ているのだろうか……。

私は兄上に一度も「妹」とよばれたことがない

私には兄上がいまいちよく分からない、昔は兄上のことなら何でも
知っていたのに……。

私には何が足りないんだ？力か？全てを叩き潰す兄上のような圧倒
的な力か？

もう分からないどうすればいいんだろう

兄上……私を導いてください……兄上

〈リョーマ視点〉

リ『で、なぜ頭を下げている。千冬さん』

俺の前には頭を下げている千冬さんがいた

千冬『お前のおかげで一夏を助けることができた。だから……有
り難う』

リ『頭を上げてください。これは篠ノ之博士との約束でしたので礼を言われることではありません』

千冬『しかしだな・・・』

しかたないな

リ『なら、こちらの頼みを聞いてくれますか』

千冬『頼み？いいだろう。なんだ？』

リ『俺の大切な「妹」がとある事情で訓練でいまいい成績がとれなくなりふさぎ気味なんだ。俺以外の教えを受けて「妹」にはもとのもどつてほしい』

これは俺の本心だ。

千冬『そんなことならお安い御用だ。ただし、私の教えはスパルタだぞ？』

リ『かまわない。おれがやるとどうしても少し甘くなってしまう』

千冬『ほう？どうみてもスパルタのような見た目だがな？』

リ『それは俺の全ての感情がないからだ』

千冬『っ！？それは失礼した』

なぜ感情が無いというと謝るんだ・・・まったく

リ『謝られる要素がないな。べつに苦しめたことがないからな』

千冬『・・・（感情がないなんてどうしたらそんなことになる？）』

リ『では、「妹」を・・・ラウラを頼む』

（ラウラ視点）

あれから3日程経過した

私がいまだに自分の存在理由について悩んでいると

千冬『ふむ、お前がラウラか？』

いきなり声を掛けられた

ラ『っ！あ、あなたは？』

今日の前にいる女性はビシツとスーツを着こなし顔は整っており男女問わず振り向くようでも綺麗な人だった

千冬『今日から1年間お前を鍛えることになった織斑千冬だ。お前、最近成績が下がり気味らしいな』

ラ『っ！！』

自分が一番気にしていることをこの人はさらっと言った

千冬『だが、安心しろ。この1年で昔と同じ・・・いやそれ以上にしてやる』

それが私と教官の初めての出会いだった。

（リョーマ視点）

リ『ラウラ、お前には自信と強さが足りない。だから千冬さんに徹底的につぶしてもらえ』

おれは無表情のまま続ける

リ『期待しているぞ。「妹」よ』

ブローグらしきもの4（後書き）

よし次はIS説明でもするかな

しかし書いてると意外と言葉がでてくるな

それが読者の心を寄せつけるか引き離すかはしらんけど
感想とか書いてくれたらうれしいです

主人公およびIS紹介（前書き）

今回は紹介です

いやードイツ語ってめんどくさいね

調べるのに時間かったよ

それではどうぞ

主人公およびIS紹介

主人公紹介

リヨーマ・ボーデヴィツヒ（16歳） 階級 大佐
人工の精子と卵子で造られた、いわば人造人間である
名前はリヨーマが造られた時にとある科学者がつけた。坂本龍馬が由来である

身長は182で髪は銀髪、髪型は一夏よりやや長め。両目は赤で戦闘時は金色になる（ヴォーダン・オージエにより）
顔は言わずもがな美系である。イメージキャラはいない。恋愛に興味がないため、そういうのは敏感である（他者のときだけ）一夏がハーレムをつくってぎゃあぎゃあ騒いでるのをひそかに楽しんでい（るときどきとばっちりがくる）

人工的に造られたため感情の全てと味覚がなくなっている。しかしそのおかげでセシリアの料理を普通にたべることができている
感情がないために常に冷静で無表情なため相手の印象は悪いが、話しているとき以外と親しみやすい性格である

全ての物事において天才で束も認めるほどである。
周囲からは完璧と呼ばれているがリヨーマ自身は人間として不完全なので自分は完璧ではなく天才だとおもっている

とくに戦闘においてはこの世界でリヨーマに勝てる人は皆無である。
リヨーマが6歳のときに束が開発したISの優位性にいち早く気づき束に協力する。そのさい束に気に入られる。

ひよんなことじゃじゃ馬ISの操縦者になってしまった。

妹であるラウラには若干甘くラウラが一夏のハーレムの1人になったことによりハーレム関係で問題が起るとさりげなく一夏を葬ることに参加している。

16歳なのに精神年齢が20代後半クラスである。

IS紹介

シュヴァルツエア・オルカーン（黒いハリケーン）

色は黒を主体にとりどころ青と赤と白のカラーリングになっている
開発当初の名前は轟天である

束でさえ作った後に一切扱うことが出来なかったコアを使ってリョ
ーマが作り変えた最強のIS

もともと第2世代型のISだったがリョーマの手により第4世代型
ISになっている

高性能、高機動、高火力の3拍子でチート以外の何者でもない機体
武器がガンダムパクリだが気にした時点で負けです！！！！！！！！

武器 色は黒が主体の青いカラーリングとなっている
ヴァイント・ホーゼ（竜巻）

レーザーソード兼レーザーライフル

つまりはOOのオーライザーのGNソード？です

ヴァイント・シュトウース（突風）

遠距離荷電粒子砲兼レーザーマシンガン

GNソードとかと同じ原理で遠距離荷電粒子砲が折りたたまれている
トーベン（猛威を振るう）

中距離荷電粒子砲

ヴェスパーですなはい

ラーゼン（暴走する）

脚部レーザーソード

ジャスティスの足のあれですよ

えっなんでこれつけたかって？……………なんとなく？

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力
きょうかすいげつ
鏡花水月

ISの周囲に特殊な粒子を撒き散らすことで敵が攻撃した瞬間にその粒子が自機を形どり残像をつくる

そのうちに自分は移動し敵が残像に気をとられた瞬間に相手を攻撃すると言うチート

あまりに卑怯なので緊急時以外決して使わないようにしてある

IS待機状態

普段はリストバンドで左手首に装着されているがリョーマが別の形を想像するだけでその形になる

主人公およびIS紹介（後書き）

さてこんなもんかな？

えISがチート過ぎる？

俺の頭の中はチートだらけだ

気にしたらまけだ！！

それでは

学園生活初日から波乱の様子（前書き）

ようやく原作突入ですね

学園生活初日から波乱の様子

（リヨーマ視点）

さて話を今に戻そう。あれから他の試験管ベビーだった奴らの男どももISにもしかしたら乗れるかも？と言って実験してみたが結局だめだった。

まあ、俺もオルカーン以外のISで実験してみたが駄目だった。

所かわって今IS学園受験会場にいる。どうも篠ノ之博士はおれが学園に受かると同時に世界にISを動かせる男として発表するらしい。博士の事だ。必ず世界が驚くことをしでかすだろう。

『ちよつと！その男子』

ん、なんだ煩いな

俺の後ろに女子が一人立っていた。

『なんで男子がここにいんのよ。ここはIS学園受験会場よ。男の来る場所ではないわ！！』

ホントにうるさいな

リ『ISが操れるからここに居るのだ。貴様らのような遊びで来ているのとはわけが違う』

世界では今ISをファクションとして見ている輩が多い。

そんなではことでは開発者の篠ノ之博士が泣くぞ・・・多分

『は？男がIS操れるわけないでしょ！』

リ『これから俺が受験を受ける、ウソかホントかよく観とけ』

『いいじゃない！！見てやるよ』

馬鹿な奴だな、まったく・・・ってなぜあそこに織斑一夏がいる。しかもISを起動させたぞ

篠ノ之博士・・・そういうことか

『リヨーマさん？早く来てください。試験を開始しますよ？』

リ『わかりました。今行きます』

そう言つて俺はシュヴァルツェア・オルカーンを起動させる。

その時間0.1秒・・・よしいい速さだな

『うそ・・・ありえない』

後ろで女子が驚愕しているが無視をした

さて、教師をさっさと倒すとするか

（誰かさん視点）

教師とリヨーマが向かい合う

教師はラファール・リヴァイヴ、リヨーマは自分の専用機シュヴァルツェア・オルカーン

『それでは・・・開始!!』

開始の合図とともに教師は後ろにさがりつつマシンガンを撃つ。対するリヨーマは接近しながら左手のマシンガンで相手のマシンガンの弾をすべて撃ち落とす。

『うそ！そんな』

教師が驚愕しているうちにリヨーマは相手の懐まで従来のISでは出せない速度でもぐりこむ。

『しまっー!』

リヨーマは右手のライフルの下に折りたたまれていたレーザーソードをライフルに展開し相手のISを切り刻むようにふるった

そして教師のわきをすり抜け教師の後ろに立ちライフルとマシンガンを斉射する

『えっ？えっ？きゃああああ』

一瞬の出来事に教師が困惑していると衝撃が全身を覆いシールドエネルギーが0になった

『う・・・うそ』

教師とさつきまでリヨーマを馬鹿にしていた女子が驚愕の声を上げる
それと同時に近くの壁が吹っ飛びその中に教師が一人目を回していた。

リ『なんだ、この状態は』
リ『ヨーマの呟きに答える人はいなかった……』

（リ『ヨーマ視点』）

というわけで晴れてIS学園に入れたわけだが篠ノ之博士……二ユースで俺と一夏が世界で初、男のIS操縦者であると公開した……やっぱり篠ノ之博士の仕業か
当の篠ノ之博士は予想外だなんて言ってたがああ顔は絶対知っていたな

一『なあ』

おっとそうだった、ここはIS学園内の教室1-1である
奇遇にも一夏と同じクラスだった。しかも隣の席

一『あんたがリ『ヨーマ』だよな』

リ『俺以外の男は一夏以外ないから、そうだな』

一『なんで俺の名前知ってたんだ？ってああ二ユースか』

リ『いやそれよりまえだ、お前が誘拐されたとき知った』

一『っ！なんでそれを！？あれは公には……』

リ『なにせお前を探すのに協力したのは俺だからな』

一『なっ！まじでか……ありがとう』

リ『俺は篠ノ之博士との約束を守ったまでだ、だが礼は受け取っておこう。SHRがはじまるな』

そう言つてドアの方を見るとドアが開き教師が入ってきた

受験の時壁破壊して出てきて目回してた先生だな

山『みなさん！初めまして山田真耶といます！みなさん1年間お願ひします。それでは自己紹介してもらいます』

そう言つて一人ずつ名前を読んで自己紹介させている

俺は横にいる一夏に目を向けた……何をそんなに悩んでいる……いやあの顔は落ち込んでいる顔か

山『織斑君？織斑君？』

先生の声にも反応してない一夏・・・だいじょうぶか？

山『織斑君！！』

一『はっ！？はい！！』

変な声になっているぞ一夏・・・こいつおもしろいな

山『いついま自己紹介をしていてあから順番で〜』

先生が一夏に説明しているのを少しぼんやりしながらみると一夏が自己紹介をはじめた

一『はじめまして。織斑一夏です・・・』

ながい沈黙がみんなが何を言っただろうと期待してる

でもあの顔は何も考えてないな

一『・・・以上です』

ずしゃああああああああ

とか聞こえてきそうなほど皆こけた、こけたと言っても椅子に座ってるわけだから表現だが

スパアアン

一『いったあ！！』

なんだ、千冬さんか・・・いや織斑先生だなここでは

千『ろくに自己紹介も出来んのかお前は』

あの出席簿いつたい何で出来てるんだ・・・普通叩いてもあんな音しないだろ

一『ちっ千冬姉』

スパアアン

千『織斑先生といえ馬鹿者』

一夏は痛みで悶絶している

千『さて諸君、私がこの担任の織斑千冬だ。貴様らを1年で使い物の操縦者にするのがわたしのしごとだ』

『きやあ〜〜〜。あの千冬様よ〜〜。本物だわっ！信じられない』

黄色い声が教室内を飛び交う。煩い・・・。

それと10年間ISに乗ってた俺はここで何を習えばいい？篠ノ之

博士の次にISをいじくっていた俺が

千『まったく毎年毎年こんなのはっかかりか……。こんなのかこの学園にはいないのか……。?』

知りませんし知りたくもないですよ織斑先生。

千『リヨーマ、お前も自己紹介しろ』

面倒だが出席簿で叩かれるのはごめんだ

リ『リヨーマ・ボーデヴィツヒです。これから1年間よろしくお願
いします。』

『かつこいいい』』

『織斑君といい、リヨーマ君といいイケメンすぎる』

『結婚して』』

最後の奴黙ろうか

千『さて山田先生。授業を』

山『はっはい!』

山田先生雰囲気にもまれてる大丈夫か?これで

授業中

暇すぎる 基礎をやっているんだが俺は応用編すら楽々と解ける

ISのあの意味の分からん分厚い本なんて内容全部暗記してる

一夏は横で青ざめてる

女子どもは後ろで少し騒がしい

俺は暇だから寝てたいが何分斜め前に織斑先生がいるから寝れない

暇だ……

山『さて、ここまでで誰か何か分からないことありますか?』

いやあの分厚いもんよんでりゃ誰でも……。一夏お前読んでない
なその顔

一『はい』

山『はい織斑君?どこが分からなかったですか?』

一『全部わかりません……。』

やっぱりだよ

千『織斑、ISの教本ちゃんと読んだのか？』

出席簿が震えてるんだがなぜだろう

一『あれ？あれなら古い電話帳と間違えて捨て・・・』

スパアアン

本日3回目か名物にでもなるなこれは

千『貴様にはもう一つくれてやる、一週間で全部覚える』

一『なつ、無理・・・』

千『分かったな(ギロ)』

一『はい』

ばかだな、一夏は

休み時間

一『ふあ~~~~』

一夏は疲れたように背を伸ばした

リ『徹底的な勉強不足だな』

一『そう言ったってここに入るって決まってからあれ貰ったんだし、

しょうがないじゃないか。むしろリヨーマはあれ分かったの？』

リ『10年まえからわかっている』

一『へっ？10年前？』

リ『ああ10年前に篠ノ之博士からISのデータを貰ったところから』

一『リヨーマってドイツで何してたの？』

リ『軍に入ってさまざまなお仕事をしていた』

一『そうなんだ』

そう言って話をしていると

『ちよつとよろしくて？』

と言って話しかけてきた女子がいた

髪は金で縦ロール肌は白く眼は蒼のイギリス人か

たしか代表候補生のセシリア・オルコットか

一『んあ？』

リ』どうした』

セ『まあ！なんですその反応は！せっかくこの私が話しかけているのですからそれ相應の態度をとるべきではなくて！！』

いや相應の態度だったが
セ『まあいいですわ、わたくしはイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットと言いますわ。あなたたちの事はすでに存じ上げてますから紹介はいいですわ』

一『なあ、ひとついいか』

最悪に嫌な予感だ・・・許可しない

セ『なんですの？』

一『代表候補つてなんだ？』

ずしゃああああああああああああ

二回目か・・・しかも今度はちゃんとこけてるな

セ『代表候補を知らないとはやはりあなた方「男」は無知で愚か者ばかりですわね』

男つて言い方にとげがあったな

リ『一夏、代表候補とはその名の通り国家の代表になれそうな人のことだ』

一『へへ、ちなみにリヨーマもその代表候補なのか？』

セ『野蛮で愚かな男が代表候補になれる「リ』俺はドイツの国家代表だ』わ・・・け・・・』

一『つてことはこいつよりすごいのか？』

リ『そうだが、ちゃんと名前で呼んでやれ』

キーンコーンカーンコーン

セ『話の続きはまたつぎですわ！』

やれやれ

二時間目

千『そういえばクラス代表戦のための代表を選ばなければならんな、誰か立候補もしくは推薦する奴はいるか？』

『はい！織斑君がいいと思いまゝす』

一 『えっ？』

『リヨーマ君に一票入れまゝす』

リ『……………』

おれが出たら話にならんたる

セ『このわたくしセシリア・オルコット、立候補しますわ！！実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の男にされては困ります！男がクラス代表などこのクラスの恥にしかありませんし、わたくしにそのような屈辱を一年間も味わえと！？』

一 『うるさいな、イギリスだってそんなに大層な国じゃないだろ？世界一まずい料理で何年覇者だよ？』

勝手にヒートアップするな一夏

セ『あなたは、わたくしの祖国を侮辱するのですか！！』

一 『先に侮辱したのはそつちだ』

どンドン暑くなっていくな二人だけ

セ『ならば、決闘ですわ！！』

一 『いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい』

セ『では、ハンデはどのくらいつきますの？』

一 『おう、どのくらいつくりゃいいんだ？』

セ『……………もしかしてあなたがハンデをつけると……………？』

一 『当たり前だろ？』

……………静まりかえり

そして爆笑。煩過ぎる

『織斑君いくらなんでもそれはないよ！男が強かったのは昔のことなんだから！』

いやおれならISに乗らなくても勝てるが

一夏はすこしむっとした表情で一 『ならハンデはいらない』

セ『あら、ほんとにいいのですか？』

一 『男に二言はない』

言い切ったな一夏、ならば

リ『俺も一夏に俺に集まってる票と合わせて推薦する』

一『えっ？それってどういうことだ？』

リ『さつき俺に票がはいっただろ、つまりそれを一夏にやることで候補から外れると言うことだ』

千『いいのか？リヨーマ』

リ『勿論』

千『では織斑とオルコットの決闘は一週間後第3アリーナで行なう』
その後は普通に授業をした

休み時間

『ちゅっといいか？』

誰だこの子は

女子としては割りと高い160cm黒い艶やかな髪はポニーテール
でまとめてある。顔立ちは美人の部類にはいる。誰かに似ているな。
・・篠ノ之博士か？

一『箒か、どうした？』

箒『・・たしか篠ノ之博士の妹さんの名も箒だったな
それにさっきの自己紹介でいったな篠ノ之だって

箒『ここではすこし・・屋上ではどうだ？』

一『ああ、べつにいいが』

一夏はばつが悪そうに俺をみた

リ『俺のことは気にしなくていい、行ってこい』

一『ああ分かった』

放課後

リ『みつけたぞ、一夏』

一『リヨーマ？どうした？』

リ『どうしたもなにもお前のISの訓練だ』

俺の後ろには箒もいる

あの後仲良くなっておいた一応

一 『ISの訓練?』

箒 『一夏、お前はISの訓練もせずにオルコットと戦う気か?』

一 『あつ忘れてた』

こいつ・・・大丈夫か本当に

リ 『ならこれから訓練を開始するぞ。織斑先生から許可はとってある。打鉄に乗れる様にしてあるから』

一 『今すぐに?』

箒 『当たり前だろ』

一 『マジでか・・・』

俺と箒は一夏をおもいっきりいじめた。

その後

山 『織斑く〜ん、リヨーマく〜ん』

リ、一 『はい、なんででしょう』

山 『お二人が暮らす寮の鍵をもってきました』

そつえば、ここは寮生活だったな

俺の鍵は1026と書いてある・・・なんで俺と一夏でそれぞれ鍵をわたしてあるんだ

リ 『一夏、お前の鍵は何番だ』

一 『1025だけど』

箒 『なに!1025だと!!』

一 『どうした?箒?』

箒 『い、いやなんでもない』

さては、同じ部屋か箒の顔が赤いからな

リ 『俺は誰かと相部屋なんですか』

山 『いいえ、リヨーマ君は今は1人です』

普通は俺と一夏だろ

山 『あと二人は大浴場ではなく、部屋のシャワーを使ってください』

リ『分かりました』

一『えっ！何ですか？』

山『織斑君は女子達と一緒に入る気ですか？』

一『あっそうか、風呂には入りたかったな』

リ『そのうちできるだろう』

山『はい、いま作っています』

一『ほんとですか？』

山『はいそうです。』

一夏・・・ひっぱるな風呂のくだり

リ『まあいいかもどるか一夏』

一『そうだなそれでは山田先生有り難うございました』

寮内で

リ『こつちが俺の部屋だな』

一『ならこつちが俺の部屋か』

リ『では一夏また明日』

一『ああ、また明日』

そういつて俺たちは部屋に入った

リ『少し疲れたな、今日は・・・いやある意味面白かったな』

なんて思っていると隣が騒がしい

なんだこんな時間に煩いな

俺は隣へとむかった

リ『何をしている、一夏と箒』

案の定一夏は箒と相部屋だった

一『いいところにリヨーマ！助けてくれ！』

箒『リヨーマ！一夏を抑えろ！』

リ『どつちの意見も拒否だ、しずかにしろ。煩い』

一、箒『すつすまない』

リ『喧嘩だとしても互いに竹刀は持つな』

一『ごめん』

リ『幼馴染が相部屋なのだから多少の事故も目を瞑れ、そのたびに騒がれたらそのたびに周りに迷惑だ』

箒『分かった』

リ『なら、いい。どうした、一夏驚いた顔をして』

一『いや、リョーマがあまりにも長く喋るから』

リ『無表情だから少ししか喋らないわけではない。俺は感情の全てがないだけだから無表情以外の表情が作れないだけだ』

一、箒『……』

リ『別に気にする必要がないぞ、』

一『ソツソツか』

リ『まあ、話し合いは静かにやってくれよ』

箒『分かった、すまなかつたな』

リ『いや、そうだ一夏、これからも放課後に訓練するからな』

一『おつおつ（また今日とおんなじことすんのかな？あれはきつすぎるんだが）』

リ『それじゃお休み』

そういつて俺は自分の部屋に戻った

リ『ふうさてねるか』

そうして初日が過ぎた。

一週間後

山『着ませんね織斑君の専用機』

そう一夏には専用機が来ることになったのだ

箒『このままでは、不戦敗になりますよ』

そうその専用機がこないのだ

山『きましたよ！織斑君の専用機が』

一『これがおれの専用機……』

山『その名も『白式』です』

箒『白式……』

白一色ともいえるカラーリングである白式なかなかいい機体だな

しかしどこか怪しい日本の技術はここまで進んではないはず
まるで篠ノ之博士が作ったようなISだな
千『時間がない、織斑すぐにいけ』

リ『一夏』

一『うん？』

リ『必ず勝てよ。でなければあの訓練の意味がない』

一『ああ、必ず勝つぜ』

リ『なら、いってこい』

一『ああ、いってくる!!』

そういつて一夏はアリーナへ飛んでいった

く一夏視点く

ここまで何とか生き抜いたんだ

絶対の勝つてやる。しかしリヨーマのやつほんと容赦がなかったな
というかナイフ一本でISに勝つてなんだよ
チート過ぎるだろ。

でもそのおかげで大体の操作は憶えたからな

さてアリーナには既にセシリアがまっていた

セシリアの機体はたしかブルー・ティアーズだったな

でもそれぐらいしか教えてくれなかったなリヨーマのやつ

もつと教えてくれてもいいのにリ『あちらにもこっちの情報がない
んだからあいこだろ』

まあそうだけど

セ『あら、逃げずに来ましたのね』

一『そりゃ逃げるわけないだろ。男なんだから』

セ『そうですか、では最後のチャンスを与えますわ。泣いて謝るな
ら許してあげますわよ』

一『悪いけど、謝るつもりはないよ』

警戒、敵IS操縦者が射撃モードに移行。セーフティのロック解除
を確認。

くるか!!

セ『では、これでお別れですわ!』

そういうなりセシリアは手に持っている武器スターライトMK?で俺を撃ってきた

俺はすぐに回避行動をとりレーザーをかわした

セ『よくかわしましたわね。ですが、いつまで持つかしら!』

まるで雨のようにレーザーが降り注ぐ

ー『うおおおおおおお』

俺はそこに向かっていった

ー『はあ、はあ、くそっ』

セ『男の癖になかなかしぶとかったですわね。ですがこれで終わりです。さあ、眠りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブル

ー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!』

そういうとブルー・ティアーズから小さい装甲がとんできた

なんだこれは?

セ『さあこれでおわりです。いきなさい!ブルー・ティアーズ!』

セシリアがそういうとその装甲がこちらに向かってきた

何だこれ?まさかビット!!

ー『ぐああああ!』

避けきれずにビットからの攻撃を食らってしまった

くそ!全距離からの攻撃か

俺の武器は近接ブレードの「雪片」しかないってのに・・・いや!!
れが使えるのか

だよなりヨーマ?

〈回想〉

ー『近接武器の強み?』

リ『そうだ、なんだと思う』

ー『うーん・・・だめだ分らない』

リ『それはな、近接しかできないと言う固定観念だ』
一『ん？それが何で強みなんだ？』
リ『敵からしたら相手は近接だけつまり遠距離から攻撃は決して来ないと油断する。かならず隙ができてしまうそこを狙い一気に接近し敵を叩くこれが近接の強みだ』

く今く

さらにビットの対策も出来ているこれなら！！

おれは気合を入れなおしビットに対応しつつ隙をねらう

そうしながら俺の手は無意識に動いていた

千『あの馬鹿者浮かれているな』

山『あ、えと、どうしてわかるんですか？』

千『さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、

一夏の昔からの癖だ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする。』

千『（さてどうなる・・・？一夏）』

くセシリア視点く

なんでですの？急に動きがかわりましたわ！？

ビットがどんどん落とされてしまう

ビットの弱点に気がついてこのままでは奥の手をつかうしかないですわ

一『これでおわりだっ！！』

いつの間にか彼が目の前にいた

セ『掛かりましたね。ブルー・ティアーズは4機だけではありませんせんのよ』

そういつて腰のミサイル装備のブルー・ティアーズを彼に向けて放つ

く一夏視点く

俺の目の前をミサイルがせまる

— 『しまっ—』

俺の視界は真っ白に染まった

（リヨーマ視点）

— 夏が煙に包まれるのを視認する

簡単なミスを確かにしたな

千、リ 『機体にすくわれたな』

千、リ 『・・・』

何故被ったかは置いておこう

煙が晴れると今までと違った姿の白式がいた

（— 夏視点）

何だこれ？ 「フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。」

— 『これを押せばいいのか？』

俺は確認ボタンを押した。その後、膨大なデータが整理された。

セ 『ま、まさか……一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定だけ

の機体であそこまで戦ってたっていうの！？』

— 『どうやらそうみたいだ』

武器はつと……近接ブレード「雪片貳型」

— 『これは……千冬姉が使ってた武器だよな……ふっ。俺は世

界で最高の姉さんを持ったよ』

セ 『？何を言っていますの？』

— 『俺も、俺の家族を守る』

千冬姉がそうだったように。

— 『とりあえず、千冬姉の名前を守るさ！』

そついうとそれに答えるように雪片にエネルギーが溜まる

— 『いくぞっ！—』

千 『ばかな奴だ全っく』

千冬姉が何かいっていたようだが俺には聞こえなかった。

セ『くっ』

ビットを全て壊しおれはセシリアに切りかかる

ー『うおおおおお!!』

セシリアに雪片が当たる瞬間

ビーーーー

『試合終了。勝者ーセシリア・オルコット』

なんでだ？ん？シールドエネルギーが・・・ない!!

（リヨーマ視点）

ー『すまん、リヨーマ。負けてしまった。』

リ『勝負に勝って、試合に負けた。それだけだ。』

ー『でも!!』

リ『俺は勝てと聞いた。お前は勝負にかかった。それで充分だ。いや、充分すぎる』

ー『ありがとう。リヨーマ』

いい笑顔だな。無駄に、浮かれてなければ初期設定で勝てたと言うのに

まあここは褒めておこう専用機に始めてのってここまで戦えたのだから

リ『よくやったな。ー夏』

おれは無表情のままそういった

それから2、3日後

『織斑君クラス代表おめでとう』

パパパ〜ン

ー『何でこんなことに?』

セ『それは私が代表を辞退したからですわ。』

ー『なんで?』

セ『試合には勝ちましたが勝負には負けましたわ』

一「(リヨーマもいつてたな)」

セ「あと私の事はセシリアと呼んでください。一夏さん」

一「ああ(なんだろうか。態度がちがいすぎる)」

リ「(セシリアがおちたな。筭とセシリアに挟まれる一夏か・・・

これはおもしろいな)」

「すみません。いいですか？」

俺たちの前に1人の女子・・・2年か

一「あなたは？」

「わたしは2年のまゆずみかおるこ 黛薫子です。織斑君にクラス代表になった感想を

貰いにきました。それではさっそくクラス代表戦に向けて意気込

みを」

一「えつと頑張ります。」

黛「それだけ？なら捏造するか。ではリヨーマ君なんで代表候補を

降りたの？」

リ「10年ISに乗っている俺よりまだ日の浅い一夏に経験をつま

せたかったからです」

黛「これは捏造しなくていいね。有り難う、それじゃ最後に織斑君

を中心にみんな写真をとるよ。ハイチーズ」

パシヤ

そうして一夏のクラス代表パーティーは幕を閉じた

学園生活初日から波乱の様子（後書き）

疲れた

こんなに文が長くなるなんて予想外です

次はリヨーマとセシリアの戦闘および彼女がでてきます
見てくれたかたには感謝です

嵐はいつも突然に（前書き）

今回はクラス代表戦の少し前のお話とクラス代表戦

彼女もついに参戦！！

言わなくてもわかるよね

それと今更ながら更新は不定期です

あとちよっとした失敗で本文が保存できんから時々書き途中で投稿

されることがあるのでご注意を

ホントすいません

それではどうぞ

嵐はいつも突然に

（リヨーマ視点）

セ『リヨーマさん！私と闘って下さい！』
なんだと？

リ『なぜ、そんなことをしなければならない』
千『リヨーマ、貴様は女子の頼みを聞かんのか？』

リ『する必要のないことは極力しないので。それに俺とセシリアでは勝負にならず俺がかちます。』

ちなみに名前で呼んでるのは本人の希望だからだ。

セ『それでもお願いできませんか？』

リ『……ならばお前にみせてやる。戦闘の天災の戦い方を。

もう二度と闘いたいなど言えないようにしてやる』

セ『……！では場所は「リ」第三アリーナの放課後でいいだろう』

「わかりましたわ」

セシリアはそういうと自分の席に戻って行った

一『リヨーマ、いくらなんでもいいすぎなんじゃ？』

リ『10年間自分のISをいじってた俺が試作機にごときに敗けるわけない。それに前の戦いでセシリアの戦いの癖は覚えた。セシリアには悪いがセシリアでは俺には絶対に勝てん。もって5分がいいとこだ』

一『……（俺あんなに苦戦してしかも負けたのにそれを5分で？自信がなくなるなあ……）』

リ『お前は白式に初めて乗ってあれだけ戦えた。だから自信を無くす必要はないぞ』

一『心を読まれた！？』

リ『顔に出ていたぞ』

一夏はむむむと言って黙ってしまった

しかし授業は退屈だな……。

〈放課後〉

リ『一夏わざわざここに来なくてもよかつたんだが』

此処は第三アリーナのピットの中、ここにはいま織斑先生と一夏と山田先生と筈がいる

俺はすでに愛機、シユヴァルツエア・オルカーンを身にまとっている

一『いや、応援しようかな』と』

リ『それなら観客席でも出来たぞ』

一夏がここにいるから筈まできたぞ

一『……まあ頑張れよ』

リ『言われるまでもない。「ドイツの死神」と呼ばれた天災を見せやる』

そう言っておればピットから飛び出した

一『ドイツの死神ってなんて物騒な……』

千『戦場であいつを見たものはほとんど死んでるそうだ』

一『すべてじゃなくて？』

千『殺すなという命令が下りる時もあるそうだからな』

何て会話があつたらしい

セ『きましたわね、リヨーマさん』

リ『一夏達に捕まつててな、少し時間がかかった』

セ『気にしてませんので、では』

リ、セ『勝負』

〈セシリア視点〉

いきなり全力で行かせてもらいます!!

セ『ブルー・ティアーズ!!』

私はブルー・ティアーズを展開しました

刹那、リ『動きは読んでいる』

彼の抑揚のない声が私の耳に聞こえた瞬間、ブルー・ティアーズがすべて撃ち落とされた

セ『なっ!』

リ『セシリア、お前はブルー・ティアーズを展開するとき展開の仕方が毎回同じだ。それでは、狙って下さいと言っているようなものだ』

まさか・・・一夏さんとの試合を観ただけでここまで出来るなんてリ『お前の武器は全部見せてもらったからな。今度はこちらが見せてやるっ』

そう言うのと彼は左手のマシニングの下に折りたたまれている銃身を展開し銃口を私に向けた

（リヨーマ視点）

リ『まずは荷電粒子砲、ヴィント・シュトウスだ』

そう言うって俺は荷電粒子砲をセシリアのスターライトMK?めがけて放つ

セシリアはとっさに避けるが俺の荷電粒子砲の速さはぶつうとは違うセシリアはよけきれずスターライトに当たりスターライトは爆散するセ『きゃああああ』

爆発に少し巻き込まれブルー・ティアーズのシールドエネルギーが少し減る

リ『次は中距離荷電粒子砲、トーベンだ』

そう言うって背中にしてある銃身をセシリアに向け、放つセ『くっ!』

セシリアは回避行動を続けるが、武器がないので反撃できない俺はさらにマシニングとライフルをつかいセシリアを追い詰める

俺のマシガンとライフルもレーザーなのでどちらも荷電粒子砲より劣るが威力は高い

セシリアの周りの地面を狙い姿を目視出来ないようにして高速で近づく

俺の愛機の最高速度は3000キロ普通のISは決して追いつけない速さだ

リ『次はレーザー、脚部に装着したレーザーソードだ』

セシリアの目の前にきてそう言い回転するようにセシリアを切りつける

セ『な！え？きゃあああ』

一瞬で目の前に来た俺に困惑していたが俺は無視してセシリアのシールドエネルギーを削る

セ『このっ！』

ミサイル装備のブルー・ティアーズをセシリアは放つが俺はそれを蹴って切り壊す

リ『おわりだ、レーザーソード、ヴィント・ホーゼ』

右手のライフルの下に折りたためてあるレーザーソードを展開、一気に切り付けセシリアのシールドエネルギーを0にした

リ『5分ジャストか。やはり代表候補は伊達じゃないな。普通なら2分でかたがつくんだがな』

セ『褒め言葉として受け取っておきますわ』

『勝者、リヨーマ・ボーデヴィツヒ』

くピット内く

リ『篤、なぜ一夏はああも落ち込んでいる』

篤『リヨーマがセシリアをいともたやすく倒したからだ』

リ『俺と一夏では経験が違うから当たり前だと言ったのに、まだ落ち込んでいるのか』

ああいうのはほっとくに限る

「次の日」

「ね、聞いた？二組に転校生が来るんだって」

「いまだに落ち込んでいる一夏を横目に見ながらその話を聞く

セ「こんな時期に転入生だなんて、私の実力をいまさら恐れての編入かしら？」

「どの口がそれをいうんだか

『でも専用機持ちはこのこと四組だけでしょ。なら絶対勝てるよ！』

『その情報古いよ』

ドアから声がしたからそちらを向くと背の低い女子がこちらを指さしている

『中国の代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音あんたたち一組に勝ちを渡さないわ！』

「！」

「一夏が代表だからあり得るかもな

しかし中国代表候補か候補生がこの学園に来る必要があるのか……俺もだが

「一鈴。おまえ鈴か！」

「一夏の知り合いのようだな……ということは一夏のハーレム要員だな、おそらく

鈴「そうよ、おど」
「なにかっこつけてるんだ？似合わないぞ」
「なっ！なんてこと言ってるのよ」

セ「一夏さん！あの人は知り合いなのですか？」

第「そうだぞ！一夏！説明しろ！！」

お前らSHR前だということをお知らせするな

千「おい」

鈴「えっ？」

スパアアン

鈴「いったい」

千「いつまで教室の前にいる？邪魔だ」

織斑先生、気配消して立ってたくせに邪魔はないだろう

鈴『一夏！覚えておきなさい！逃げないでよ！』
この学園内でどこに逃げられる場所があるんだ
千『さて授業を始めるぞ』

SHRすっ飛ばしたぞ織斑先生

（昼食）

鈴『まっつたわよ！一夏』

ラーメンもって待つかふつう

一『何してんだ？鈴、早く座ろうぜ』

鈴『わっ分かつてるわよ、まったく』

一『しかし久しぶりだな、おばさん元気か？』

鈴『ええ、お陰様でね、でもビックリしたわよ？なんでISをつか
えてるわけ？』

一『いや、それは俺にも分からないだよ』

二人だけで話すな。こっちの二人がご立腹中だ、飯が不味くなる。
もっとも表現だが

俺には味覚何てないからな

セ『一夏さん！！いい加減説明してください。彼女は一夏さんの何
なんですの？』

篤『そうだ！もしかして付き合ってるのか？』

それはないな篤、一夏は朴念仁だ。お前が一番しってるだろ

一『そんなわけないだろ。鈴は俺のセカンド幼馴染だよ』

意味の分からん単語が出てきたななんだセカンド幼馴染って

幼馴染は赤ん坊のころからの付き合いの奴の事を言うはずだったが
篤『なんだ？セカンド幼馴染って？』

一『篤は俺のファースト幼馴染だろ？だから鈴はセカンド幼馴染だ
よ』

一夏・・・俺でも理解できんことを話すな。話に聞けば鈴は篤がい
なくなつた次の年くらいつまり小5のときからの付き合いだそうだ
それはただの友達だ・・・一夏お前は馬鹿か

鈴『で、あんたが男でもう一人のIS操縦者でドイツの国家代表？』
リ『ああ、リヨーマ・ボーデヴィツヒだ』

鈴『ふくん、あんた強いの？』

リ『お前なら5分ちようどで倒せる・・・つまりお前はセシリアと同等だな』

鈴『なっ！言ってくれるわね。私があんたなんか「一」鈴、リヨーマと闘ったらISが壊されちまうぞ』「は？そんなわけないでしょ？』

リ『相手の実力が分からん奴はほっとけ。どうせクラス代表戦は一夏がでるのだから』

鈴『ふんっ！一夏クラス代表戦であんたがどれだけ強いか確かめさせてもらおうわ』

一夏を再び鍛えるとするか

あいつ急降下でグラウンドにクレーター作ったからそこの訓練もしないとな

リ『一夏』

一『うん？』

リ『今日の放課後から訓練再開だ』

一『マジでか！！！』

お前のためなのにお前が嫌そうな顔をしてどうするもつとも訓練という名の拷問みたいなものだが

今回は鈴音のISの特徴を教えるでもいいだろうし

鈴『ねえ訓練つて何してるの？』

リ『戦うかもしれない敵に教える気はない。』

一『リヨーマ・・・。言い方にとげがないか？』

リ『俺は大概この口調だが』

とげがあるように聞こえるだけだと思っが

（放課後）

一『衝撃砲？』

リ『そうだ、今回の強敵は衝撃を相手に飛ばしてダメージを与える
見えない弾丸だ』

一『見えない攻撃をどうやってかわせと』

リ『相手の目線と銃口付近の空気のがみが見えれば問題ない』

一『簡単にいつてくれるな・・・』

リ『相手の目線ならばお前でも出来る。相手は攻撃した居場所を必
ず目視する。こんな風に』

俺は一夏の肩を見ながら肩を攻撃する

一夏はギリギリで防御した

リ『合格だ。今日はこれを続ける。』

一『おうっ！』

（寮内）

隣がつるさい

おそらく鈴音が一夏との相部屋を希望したのだろう。

そして、一夏の朴念仁が発動したのだろう。

リ『・・・まあいいか。寝よう』

クラス代表戦当日

あれからいろいろあつて一夏と鈴音のなかは若干悪い。一夏のせい
でリ『一夏。俺が教えた事ちゃんと生かせよ』

一『ああ、分かってるぜ』

しかしなんだ・・・嫌な予感がする

俺の嫌な予感は外れることを知らない。いつでも二人に加勢できる
ようにしておこう

そう思つてると一夏がピットを飛び出した。

そして二人の戦いがはじまった

リ『訓練のした甲斐があつたな。前回より動きの切れがいい』

初撃を防ぎ攻めつ守りつ行動し、衝撃砲も難なくかわしているが接

近が出来ていない

リ『だが、一夏ならあれの弱点に気が付くはずだ』

その時、俺の嫌な予感がさらに危険を訴えかけてきた

リ『そろそろか。』

俺はアリーナに行けるように準備をした

〈一夏視点〉

あの場所だな!!リョーマが言っていた衝撃砲の弱点は!

その場所めがけてイグニッションブースト瞬時加速・・・千冬姉から教えてもらったこれで

けりをつける!!

—『うおおおおおおおおお!!』

鈴『しまっ!!』

俺の攻撃が鈴に届く瞬間!!

いきなりアリーナが大きく揺れてアリーナに何かがおちてきた!?

〈リョーマ視点〉

くそ、アリーナが揺れた瞬間に全ての扉にロックが掛かった。これ

は解除に時間がかかるな

アリーナでは土煙が上がっている

しかしこのロックは以上に固いな、

一夏たちに向かってビームが飛ぶのが見えた・・・ビーム兵機とは

どこの国のISだ

土煙が晴れるとそこには全身装甲フルスキンの大型ISの姿があった

なんだあの大きさ、人が操縦しているとおもえない。となれば無

人機か

それにあのビーム兵機どこの国でも作れるはずがないとすれば・・・

篠ノ之博士か

なぜ毎回あなたがでてくるんだ。一夏のためか?それにしてはやる

ことがひどすぎるな

いまだに人の考えだけが理解できない

謎のISに一夏たちは若干苦戦しているようだ。こっちはもうすぐだからそれまで持つているよ

二人が何かを話しているようだ。その間奴は動く気がないようだ。

一夏達が動き出したな一夏が前で鈴音が後ろか・・・衝撃砲を使ってもう一回瞬時加速を使う気か

おっとロックが解除できたな

アリーナでは一夏が奴に一太刀浴びせているところだった

俺はシュヴァルツェア・オルカーンを身にまとう

再び一夏達を見ると奴が一夏を撃とうとしているところだった

こいつの最高速なら間に合うな

（鈴視点）

一夏の攻撃でまだ倒れないなんて！

しかも一夏はもう動けないのにその一夏を狙っている！

ここからじゃ間に合わない！！

鈴『一夏あああああああああ』

あたしはただ一夏に迫るビームを見ることしかできなかった

一夏にビームが当たる瞬間突然ビームが裂けた？

ビームが全て消えるとそこには一夏の前にレーザーソードを前に掲げたリヨーマがいた

（リヨーマ視点）

間に合ったな、しかしビームを切り裂くとは初めてだったが以外と大したことなかったな後は

リ『いい加減、堕ちろ』

俺はヴィント・シュトウースを展開し奴に向けて放った

攻撃は奴の左腕を消滅させ奴は崩れた

一『サンキュ。リヨーマ』

リ『少し遅くなつてしまつたな』

一『いや、ある意味いいタイミングだったぜ』

鈴『一夏!!大丈夫!?!』

一『ああ、リヨーマのおかげだな』

鈴『もう少し早くこれなかつたの?』

リ『ロックが固くてなかなか解除できなかったんだ。』

鈴『まあ、一夏が無事だったからいいけど』

小声で喋つてるから一夏には聞こえてないが、俺は地獄耳だから聞こえてたぞ

〈数日後〉

鈴『リヨーマ!あんた、あたしと戦いなさい!』

リ『断る、セシリアに俺と戦つた感想でも聞いてみる』

おれは鈴に戦いを申し込まれていた

鈴『セシリア!リヨーマと戦つた感想は?』

セ『っ!おっ思い出させないでくれます!!?!鈴さん』

鈴『セシリアがすごい怯えてる!?!いったい何が?』

リ『別を開始直後にブルー・ティアーズを全て落とし、その後スターライトも落とし後はじわじわシールドエネルギーを削つていっ

ただけだ』

鈴『悪魔みたいね』

リ『死神だ』

なんて会話をした

〈寮内〉

メールがきたな、誰からだ

ラウラか、なつかしいなどれれ

ラ『いまからそちらに行きます』

ふむ、なぜ最初からこっちに来なかつたんだ

まあ、いいか。ラウラもおれ以外で真の強さを持つ男にあうのは初

めてだからな。

一夏に惚れるかもな。それはそれでいいが、兄としては若干嫌な気分になるな

しかし、あいつは千冬さんに心酔しているからな一夏と一悶着しかねんな

こんなにラウラを心配するとはまるでシスコンみたいだなとかおもいつつおれは寝た

嵐はいつも突然に（後書き）

つかれたね

一応行っとく

リョーマはシスコンではない

ラウラのことを考えつつ一夏の安否を気遣っているわけだからな
もう一度言っとくりョーマはシスコンではない

いじょうです

嵐はすべては収まらない(前書き)

今回は学年別トーナメントとその少し前のお話
では、どうぞ

嵐はすぐには収まらない

厄介なことは続くものだ

二度で済むならまだいいそれが三回、四回も続くと嫌になってくる

（リョーマ視点）

山「今日は転校生を二人紹介します」

また、転校生か

山「それでは、入って下さい」

教室に入ってきた二人を見てクラスがざわめく
何せ、入ってきた二人のうち一人は

「初めまして、シャルル・デュノアです。」

男だったからである

「お・・・とこ？」

シ「はい、こちらにおなじ境遇の人がいると」

「き・・・」

シ「き？」

「キヤーーーーーー」

またか、嫌いそれとこいつらはこのシャルルだったかをほんとに男
だと思っっているのか

「三人目よ、三人目！」

「それに美形！しかもももってあげたくなる系！！」

こんな華奢な男がいるか、肩も丸い、あの丸さは男では絶対にあり
えない

シャルルの感想はこれぐらいでいいだろう

もう一人、俺はそいつの方が気になっていた。

なぜなら

千「お前も自己紹介をしる。ラウラ」

もう一人は、ラウラ・ボーデヴィツヒだったからだ
ラ『分かりました。教官』

千『私は教官ではない。ここでは織斑先生だ』

ラ『ラウラ・ボーデヴィツヒだ』

沈黙

山『え？以上ですか？』

ラ『以上だ。貴様が織斑一夏か』

ラウラは一夏の前に立った。叩く気か。

一『そうだけど』

ラウラが一夏を叩こうとした瞬間俺はラウラの腕をつかんだ

ラ『放してください。兄上』

リ『登校初日から自分の評判を下げるな』

俺がそういうとラウラは叩こうとした手を下げた

ラ『織斑一夏。私は貴様を認めない』

めんどくさいことだ、まったく

〈授業〉

千『今日はまず、模擬戦をみてもらう。鳳、オルコット来い』

セ『なぜ、わたくしが・・・』

鈴『一夏のせいだからね、まったく』

千『ここでもいいところをあいつに見せれば好感度上がるだろうな』

セ『さて！私の相手は誰ですか？鈴さんでもいいのですよ？』

鈴『先生！早く始めましょう』

現金な奴らだな

千『お前らの対戦相手は・・・』

山『どつどいてください』

一夏の上から声がした、一夏は声の出所を探している。お前の上だ。

俺はシュヴァルツェア・オルカーンを展開し、一夏の上に移動

降ってきた山田先生の腕をつかみバランスをとらせた

山『リヨーマ君ありがとうございます』

いったいどうしたら降ってこれるんだか

千『お前らの相手は、山田先生だ。山田先生は元代表候補生だったんだぞ』

山『でも、代表候補どまりでしたし』

なるほど、山田先生が専用機に乗って俺と闘ったら、10分はかかるな

さすが教師俺が戦った教師とは段違いだな

セ『二対一ですか・・・』

鈴『さすがにちよつと・・・』

やはり、あいつらは実力の差が分らないのか、馬鹿な奴らだ

千『安心しろ、お前ら二人でも山田先生には勝てん』

セ『なっ？』

鈴『ならやつて見せますよ』

そう言つて模擬戦が始まった。

セ『鈴さんが衝撃砲を無駄に撃ちすぎるからですわ！』

鈴『あんたこそ、行動を読まれ過ぎなのよ！』

二人とも言い合いをさつきから続けているがどっちも悪いのだから無駄なことなのにな

千『これで分かつただろ、今度からは先生をもっと敬うように』

それは山田先生があだ名で呼ばれているのを見たからこうしたわけかとこんな感じで授業は続いた

（放課後）

リ『そういえば学年別トーナメントが近いな』

一『あっほんとだ（また、訓練とかすんのかなあ）』

リ『一夏、今回は自分で頑張れ』

一『えっ？訓練しないの？』

リ『今回は敵になるからな。敵を鍛えるほど俺はお人よしじゃない』

などと話していると

『ねえ、あれドイツの第三代機だよね』

『ほんとだ、あの人も練習するのかな？』

という会話が聞こえてきたのでそちらを向くと

ラ『織斑一夏、貴様も専用機持ちか』

一『だったら、なんだよ』

ラ『私と闘え』

一『断る。闘う理由がない』

ラ『私にはある。私は決してお前を認めない。お前があの人の弟などどけっして認めない』

そう言つてラウラはレールカノンを一夏に向けた

リ『そこまでにしる。ラウラ』

ラ『兄上。これは私の戦いです。口を出さないでください』

リ『勝負がしたいのなら、学年別トーナメントでしろ。』

ラウラはしぶしぶといった感じで戻って行った

第『一夏、奴はもしかして・・・』

セ『しかし、厄介ですわね。ドイツはどの国よりもISの開発が進んでいますから。第三代機はどの国によりも性能が一段、二段つえですわ』

シ『ドイツは篠ノ之博士がISを発表したところからISに興味を持っていたらしいし。他の国より多くのコアを貰ってみたいだし。』

リ『IS関係は俺の担当だったからな。抜かりはない』

鈴『そのせいで、厄介なことになったでしょうが。あいつはあなたの妹なんですよ？だったらあんたがどうにかしなさいよ』

リ『喧嘩を売られているのは、一夏だ』

一『確かに。なありヨーマ、なんでラウラは千冬姉の事をあんなに？』

リ『織斑先生は第二回モンド・グロツソの後、一年ほどドイツの軍で指導をしていた。その時ラウラは軍から役立たずと呼ばれていて

な、そんな時に織斑先生と出会い、指導を受けた、その時に織斑先生に憧れたのだろう。俺が知っているのはここまでだ、あとは知らない」

第二回モンド・グロツソの単語が出てきたとき一夏の顔が暗くなつたのを俺は見逃さなかった

（寮内）

リ「俺と相部屋か」

ラ「はい、兄上」

隣では一夏とシャルルが相部屋になつたらしい

リ「学園の様子はどうか」

ラ「ISの怖さを知らない、愚か者ばかりです」

リ「なじめそうか」

ラ「あんな奴らとなじめません」

まあ時間の問題だろう

ラ「兄上。兄上はどうして織斑一夏をかばつのです？」

リ「別にかばつたわけではない。無駄な騒ぎを起こしたくなかつただけだ」

ラ「兄上。臆病になつたのでは？」

リ「ほう、小娘が偉そうに言うな」

ラ「・・・！」

ラウラはナイフを持って俺に切りかかってくる。俺はラウラのナイフを持っている手に手刀をたたき込みラウラを押し倒しリストバンドをナイフに変えラウラの首にあてる

リ「お前はまだまだ未熟だ、そんなお前が人の性格を勝手に判断か。思い上がりも甚だしいな」

俺はラウラの上からどいた

ラ「兄上」

リ「早く寝ろ」

俺はそう言つて寝た

く数日後の放課後

『ねえねえ、聞いた？第三アリーナで専用機持ちが模擬戦してるって』

一『専用機持ちが模擬戦？』

リ『一夏、シャルル行くぞ』

く第三アリーナ

一『なっ！なんだこれ？』

リ『ラウラ・・・何してる』

そこにはセシリアと鈴がラウラに一方向的に攻撃を受けていた

リ『一夏、行くぞ』

一『ああ！』

俺たちはアリーナに入って行った

一『このやるおおおおおおお』

一夏は白式を展開しラウラに突っ込んで行った。

リ『シャルル。鈴たちを頼む』

シ『うん、分かった。気をつけて』

俺はラウラと専用機のシュヴァルツェア・レーゲンに向かって行った

一『くっ！なんだよ？動けねえ』

ラ『ふん！この停止結界にこんな簡単にかけるとはな、所詮貴様

はその程度か』

一『くっそ』

ラ『これで、終わりだ』

そう言ってラウラはレールカノンを一夏に向ける

リ『やらせん』

俺はライフルをラウラに向けて、放つ

ラ『くっ』

一『サンキューリョーマ』

リ『下がってる、一夏』

ラ『兄上。なぜ邪魔をするのです』

リ『騒ぎを起こすなと言ったはずだがな』

ラ『周りが勝手に騒いだけだ』

リ『同じことだ』

ラウラは、俺に停止結界、A I Cをつかってきた

ラ『邪魔しないでください』

リ『A I Cの開発者にA I Cを使うとはな、だから、未熟だと言ってるんだ』

俺はA I Cをつかっているラウラの腕をつかむ

ラ『なっ?』

リ『いいからやめろ、I Sをしまえ』

千『貴様ら、何をしている?』

一『織斑先生・・・』

千『喧嘩をしたいのなら学年別アリーナでしろ』

リ『分かりました』

ラ『了解です』

〈保健室〉

セ『うつ別に貴方達が来なくても勝てましたわよ』

鈴『そうよ。助けてくれなんて言っていないわよ』

どの口が言うんだか

リ『それだけ怪我してるのによく言うな』

シ『好きな人にかっこ悪いとこ見せたくないんだよね』

もう遅いぞそれ

セ、鈴『なっ何のことだか?』

ドドドドド

一『なんだ?』

急に保健室のドアが吹き飛んだ・・・吹き飛んだな間違はなく

『織斑君!リヨーマ君!シャルル君!』

大量の女子が押し寄せてきた

「シ『なつなに?』」

「これ!!」

「『学年別トーナメントタッグ申請書?』」

「そう!」

「織斑君」

「リヨーマ君」

「シャルル君」

「一緒に組もう!」

なるほどね

リ『俺はラウラと組む』

「俺はシャルルと組むよ」

「ええ」

そう言つて女子たちが肩をがっくりと落として帰っていった

セ、鈴『一夏!一緒に組もう(組みましよう)』

山『無理ですよ、二人とも』

「山田先生?」

山『二人のISはダメージレベルCです。トーナメントの出場は無理ですよ』

二人はさっきの女子たちみたいに肩を落とした

（寮内）

ラ『兄上。タッグを組んで下さい』

リ『ああ、俺もそう思っていたところだ』

ラ『兄上、絶対手を出さないでください』

リ『分かった、無理はするなよ』

ラ『ここにいるやつらに遅れは取りません』

その慢心があだになるぞラウラ

（トーナメント当日）

一 『俺たちの相手は誰だろうな』

一 夏は白式に乗りながら呟く

シ 『そうだね』

シャルルは専用機、ラファール・リヴァイヴカスタム？に乗っている

一 『やばい・・・緊張してきた』

シ 『リラックスだよ、一夏』

一 『おっ、相手がきまったぞ・・・て、マジ？』

『一試合目、リヨーマ、ラウラペア対一夏、シャルルペア』

ラ 『兄上は手を出さないでください』

リ 『ああ』

一 『決着をつけるか』

ラ 『貴様に言われるまでもない』

（ラウラ視点）

私に勝つ気があるのだな、愚かな

兄上にも見せておこう、今の私はもう役立たずではないことを

ラ 『かかってこい、二人とも叩き潰してやる』

私はレールカノンを二人に向けてはなつ

二人は一旦距離をとると織斑一夏がこちらに突っ込んでくる

ラ 『バカの二つ覚えか』

私は停止結界を発動させる

一 『相手は』

シ 『一人じゃないよ』

織斑一夏の後ろからシャルル・デュノアが出てくる

ラ 『くっ』

私は二人から距離をとる

負けるわけにはいかない

それでも二人の動きに翻弄されていた

ラ『くそっ!』

私はいら立ちが大きくなってきた

シ『動きが単調になってるよ』

しまった!すでにシャルル・デュノアは私の懐に入っていた

シ『盾殺し(シールドピアス)これは痛いよ』

そう言われた後に激しい痛みが体を襲った

これでは負けてしまう!兄上の顔に泥はつけたくない

負けたくない、負けるわけにはいかない

力が欲しい、こいつらをつぶせるほどの力が

『力が欲しいか?』

声が聞こえる

『力が欲しいか?』

そうだ、力が欲しい

『なら、望め』

何度でも望もう、私は力が欲しい!!

『ならば、力を渡そう』

その瞬間、目の前が暗くなった

〈リョーマ視点〉

ラウラのISから黒い何かが出てきた。

あれはVTシステム・・・なぜだ俺はあれを乗せてない。俺のシユヴァルツエア・レーゲンに勝手に改造した奴は誰だ。あそこの研究所だ。レーゲンの開発を手伝いたいなんて言うから手伝わせてやったのにあれを乗せるとは、許せん
ラウラを包んだ黒い何かが形をとる

リ『あれは・・・織斑先生か』

黒い何かは織斑先生を形どり雪片も形どった

一『なっ!なんで千冬姉を?』

リ『これはVTシステム、モンド・グロツソの総合優勝者の戦闘データをそのまま再現・実行するシステムだ』

一 『なんで、そんなものが？』

リ 『俺がしるか。俺はあんなものに乗せたりはしない』

シ 『一夏、危険だよ。下がるう』

一 『いや、ここは下がれない。これは俺の問題だ』

シ 『一夏？これは一夏の問題じゃないよ』

一 『千冬姉の真似事何て許せねえ』

シ 『でもエネルギーはどうするの？』

一 『あつ！ない』

シ 『もう！一夏ったら』

一 『リヨーマ、手伝ってくれ！』

リ 『俺の問題だ。なんてかつこいいセリフの次はそれが』

俺はやれやれといった感じで一夏に近づく

シ、リ 『シールドエネルギーを渡すぞ（よ）』

一 『サンキュー二人とも』

一夏は雪片を部分展開するとラウラの前にたった

一 『所詮は真似事だ。ラウラ、そこから助け出してやる』

でたな、天然誑が

一 『はあああ』

一夏は気合の入った声と共に雪片を一振りする

（ラウラ視点）

暗い、暗い、なぜこんなに暗いんだ

私は力が欲しいんだ。なのになぜ身体が動かない

一 『そこから助けてやる』

織斑 一夏の声が聞こえた

周りから声から聞こえないのにあいつの声だけが聞こえる

ラ 『貴様はなぜそこまで強いのだ』

一 『俺はそんなに強くないよ。単純な強さならラウラの方が上だよ』

ラ 『そんなはずない。お前は私に勝った。』

一「俺は強くない。でも守りたいもののためならどんな状況でも頑張れるっただけだ」

ラ「守りたいものだと?」

一「そう。箒や鈴、セシリア、シャルルみんな俺の守りたい人たちだ。その人たちのためなら俺は頑張れるんだ」

ラ「頑張れる・・・か。私にもあるのだろうか?」

一「ないなら、俺がなってやる。そして、俺もお前を守ってやる」
そう言われると視界が急に明るくなった

意識が遠くなる中兄上と目があった

その姿はどこか微笑んでいるように見えた

そこで私の意識が消えた

（リヨーマ視点）

あれからしばらくして保健室から織斑先生が出てきた

リ「先生、ラウラは」

千「全身の筋肉痛ぐらいだ。いま意識が戻っている」

そう言うと先生は歩いて行った

リ「ラウラ、入るぞ」

ラ「はい」

リ「調子はどうだ」

ラ「筋肉痛だけで問題ないです」

リ「そうか」

そう言うと俺はラウラの横に座った

ラ「兄上」

リ「ラウラ、強さとはなんだ」

ラ「え?・・・分かりません。前までは圧倒的に徹底的に敵をつぶすことだとおもっていました」

リ「分からないか、今はそれでいい」

ラ「兄上はなんだと思うのです?」

リ「それはな、誰かを守ることだ。一夏もおそらくこう答えるだろ

うな」

俺が一夏というとなウラは少し反応した

これは、惚れたな

ラ「兄上、兄上は私の事をどう思っていますか？」

リ「何を当たり前なことを。世界でただ一人の大切な「妹」だ」

そういつて俺はラウラの頭をなでる

ラ「兄上・・・／＼」

ラウラは昔のように顔を赤くしてくすぐったそうにしていた

ラ「兄上、私はいったい誰なんでしょう？」

リ「お前はお前だ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。それ以外の誰でもない」

ラ「ですが、」

リ「お前は、ただの遺伝子強化されたれっきとした人間だ。俺等の両親だっているだろ。俺が悩んだことをお前が悩む必要はない」

ラ「兄上が悩む？」

リ「とぼけるなよ。お前だってもう知っているはずだ。俺とお前がホントの兄妹（妹は「妹」）ではないことを」

ラ「確かにそうですが」

リ「この問題は俺が悩むだけだ、そして俺はもう悩みは解決した」
ラ「どんな答えを出したのです？」

リ「簡単だ。俺は俺だ。それ以外の誰でもない。お前の兄で、自分で言うのもあれだがさまざまな分野の天才で人造人間だ。」

リ「もう寝る。ラウラ、筋肉痛は意外ときついからな」

ラ「はい、おやすみなさい。兄上」

ラウラは俺に頭を撫でられながら眠った。

リ「自分が誰が分からないか・・・懐かしい疑問だ。」

自分の心の丈を二人とも話したからな。今度からは昔のように気軽に話せるだろう

〜次の日〜

山『え〜と、今日は転校生といつかなんとというか』
なんだそのしどろもどろは

そう言えば男子の浴場が出来たらしい。

シャルルと一夏で入ったらしいがいいのか、シャルルは女性なはずだが

シ『シャルロット・デュノアです。改めてよろしく。』

山『え〜、デュノア君はデュノアさんでした』

『女の子？』

『そういえば、昨日男子の浴場が出来たって？』

『織斑君、相部屋で浴場入ってまさか、知らないってことは・・・』

鈴『一夏あああああ！あんたって男はああああ』

一『待て、鈴誤解だ』

鈴『死ねええええ』

鈴は思いつきり衝撃砲をはなつ

煙が晴れるとそこにはラウラが一夏をかばうように停止結界を張っていた

一『サンキューラウツ！！』

ラウラはいきなり一夏にキスをした

俺の中で何かにひびが入ったような音がした

ラ『お前は私の嫁にする、決定事項だ』

ラウラはそう言い放った。

鈴『ふざけんじゃないわよ！！』

セ『そうですわよ！！そんなの認めませんわ！！』

一『いかん！殺られる！！』

一夏は鈴とは反対のドアから逃げようとしたが

箒『逃がさんぞ！！一夏！！』

箒が日本刀を手に一夏に迫る

一『クソ！！！！』

シ『どこに行こうとしてるの？一夏？』

窓から逃げようとした一夏の前に盾殺しを構えたシャルロットが立ちふさがる

ラ『貴様ら、嫁に手を出したらどうなるか・・・分かってるな？』

ラウラが挑発する

一『リヨーマー！こいつらを・・・て、こわっ！！！』

リ『一夏、こいつらをなんだって、お前を一回切らせてくれたらその相談乗ってやるっ』

俺はヴィント・ホーゼを構えて一夏にいう

ラ『あつ兄上？』

ラウラも恐怖に声が震えているようだ、俺のどこが怖いというのだ
リ『俺の妹を落としたんだ、それなりの覚悟・・・あるんだろ』

一『落とすって何？そんな憶えないんだけど！？』

リ『ならば・・・切り殺してやるっ！！！』

一『物騒！？』

俺は一夏をかばうラウラをすり抜け一夏に迫る

ヴィント・ホーゼをしまい、一夏を思いつき殴る

一『ぐはっ』

一『我が生涯、いっぺんの悔い無し』ガクッ

リ『つまらないな、それ』

そういつて席に戻る。

騒がしいのは楽しいことだ

嵐はすぐには収まらない(後書き)

こんな感じでいいかな？

結構思いつかないよこれ

リョーマがシスコンみたいになっちゃうな

でももう一回言う、リョーマはシスコンではない

しつこいぐらいにいうぜ

ありがとうございました

平凡とはこの学園にはない(前書き)

今回はただの？学園生活です
どしど

平凡とはこの学園にはない

（ある日）

リ『食事会ね』

一『そうなんだ、リヨーマもどうだ？』

シ『（ここでリヨーマを誘うかな普通）』

篤『全員で料理を作ってみんなで回して食べようってことだ』

セ『明日で場所は昼の屋上ですわ』

鈴『ていうか、リヨーマとラウラは料理できるの？』

ラ『私は出来ないが・・・あっ、兄上に料理を作らせるな！』

一『なんで？不味いの？』

ラ『そんなことはないが・・・、しかしだな』

リ『別にかまわんが、味は保障しないぞ』

一、篤、セ、シ、鈴『えっ？』

ラ『兄上』

リ『明日の昼だったな』

そう言っただけ俺はあるいて行った

ラ『・・・兄上は本に載っているレシピ通りに作るんだ。なのに、ものすごくおいしいのだ』

鈴『なら、なんで作らせるなって言ったの？』

ラ『私だけの特別にしたかったのだ！』

全『・・・ぷっ』

ラ『笑うな！！』

シ『いや、なんか・・・ラウラってブラコン？』

ラ『なんだ？ブラコンとは？』

一『兄や弟の事が好きだってことだよ』

ラ『それなら当たり前だろ？世界でただ一人の兄上なのだから』

鈴『なら一夏はシスコンよね』

一『なッ』

シ、セ、箒『確かに』

一『そうだったのか・・・？』

（次の日）

セ『さあ一夏さん！！私の料理をどうぞ！』

そう言つてセシリアはサンドイッチを俺たちに向ける

リ、一『遠慮なく』

そう言つて俺たちはサンドイッチを食つ

一『~~~~グっ！？』

リ『なかなかだな』

一『（なぜだ？なぜこれがかなかと言えるんだ？』

セ『一夏さん？どうなんです？』

一『ああ・・・なかなかだよ』

箒『次は私のだ』

箒は重箱を出した

一『これはすごいな』

箒『さあ食べて見る』

リ、一『よし、いただきます』

一『こいつは上手いな』

リ『一夏に同じだ』

箒『そつ、そつか』

箒は嬉しそうだ

鈴『私のも食べてよ』

一『おつ酢豚か』

鈴『そうよ、食べたいて言つてたでしょ？』

一『おつっ！』

リ『ふむ』

一『うまいな〜これ』

リ『確かにな』

セシリアだけ感想がなかなかなんだな、一夏

シ『一応作ったんだけど、どうかな?』

シャルロットは

リ『グラタンとは・・・手が込んでるな』

一『どれどれ?』

シ『ごくっ』

リ、一『旨いな、うん』

シ『ほんと!ありがとう』

リ『最後はおれか、今回は美容と健康にいいハンバーガーを作ってきた』

全『(どうやってつくった!?)』

リ『これは最近ドイツで流行っている料理屋の人気の作品だ』

全『では、さっそく』

みんなが一口食べる

全『うっ』

リ『う?』

全『うまい!これは上手い!』

リ『そうか、自信がなかったが美味いか』

鈴『どうやってこんな味が?』

リ『公開されているレシピ通りに作ったただけだが』

全『(レシピ通りだけでこんなになるか?)』

セ、シ、箒、鈴『作り方は?』

リ『今度教えよう』

と割と楽しい時間だった

〜放課後〜

リ『やれやれ』

一『ごめんってリヨーマ』

リ『謝るなら後ろの女子たちにしろ』

鈴『そうよ、一夏のせいだからね!』

セ『そうですね!なんでISを担いでグラウンド50週なんて』

リ『俺たちは100週なんだからマシだろ』

鈴『でも、これはきついし。なによりリヨーマを見てるともったきつい』

一『そうだよ・・・なんで生身でISを、しかも片手で・・・』
リ『鍛えればこんなもの簡単だ』

箒『専用機はまだいいだろうが、訓練機では体にあまりフィットしないからきついぞ』

シ『でも、その代わり25週だからいいんじゃない?』

ラ『喋ってないで走ったらどうだ?』

会話どうり俺達はISを担いでグラウンドをそれぞれ100、50、25週している

理由は、一夏がセシリアの料理の食いすぎで気絶したため遅刻、織斑先生のお怒りを買ったのである

ちなみに俺は後10週で終わる

みんなはまだ20週、箒は5週残っている

一夏はまだ60週残っている

リ『さて、さつさと終わらせるか』

俺はさらに速度を上げる

一『リヨーマ速過ぎ・・・』

鈴『そもそもISより速いって・・・』

ラ『さすがは兄上!負けられん!』

シ『僕も!』

セ『私もですわ!』

箒『私だつて!』

鈴『なら私も!』

一『なんでみんなあんなに元気なんだ?』

一夏は1人走つていった

（寮内）

リ『おつかれ、一夏』

一『もう、動けない・・・』

リ『俺はもう風呂に入ったがお前はどつする』

一『もう動けない』

リ『俺は、寝るぞ』

一『お休み』

俺達は今相部屋である

ラウラはシャルロットと相部屋

箒、セシリア、鈴は分からない

こんな状況だ

こんな風にこの学園において平凡などない
それがまた面白いものだ

平凡とはこの学園にはない(後書き)

今回はこんな感じですよ

それでは

読んでくれた方々

感謝です

一夏の周りは暴風地帯（前書き）

今回はショッピングモールです
リョーマは常に安全地帯にいます

一夏の周りは暴風地帯

（一夏視点）

シ『ねえ、一夏。』

一『ん？どうした？シャル』

シ『今度の土曜日に、買い物付き合ってくれない？』

一『ああ、いいよ』

リ『ヨーマも誘っとこうと』

（寮内）

一『なあ、リヨーマ。今度の土曜にシャルと買い物行くんだけど、一緒にどうだ？』

リ『それは、他に誰か来るのか』

一『いや、シャルがどうするんだか知らないけど多分、誰も誘ってないんじゃないかな？』

リ『なら俺は行かない』

一『え？何で』

リ『それぐらい気が付け、だから女子に「唐変木・オブ・唐変木ズ」とか言われるんだ』

一『え？そんな風に呼ばれてんの？俺』

なんか悲しいな

リ『呼ばれる由縁にすら気づかんとはやはり重症だな』

リ『ヨーマが何か言ったようだが聞こえなかった』

リ『シャルロットも大変だな、ラウラも箒もセシリアも鈴も』

なんかリヨーマが珍しくぶつぶつと何かを呟きながらベッドに入っていた

一『なんだ、唐変木・オブ・唐変木ズって』

そう言いながら俺も寝た

（リヨーマ視点）

さて一夏とシャルがデートに出かけたのを見送っていると一夏に恋心を抱いている俺命名「一夏のハーレムガールズ」

メンバーはいわずもがな、箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルロット
面白そうな予感がするので俺もついて行くことにした

（ショッピングモール「レゾナンス」）

ふむ、広いなこのショッピングモールは、さて一夏は・・・あそこだな

一夏のハーレムガールズがここそ隠れながら一夏達を観察している俺は何食わぬ顔で一夏達に近づくと

リ「一夏、シャルロット。」

一「あれっ、リヨーマ結局来たのか？」

リ「お前らとはいかないと言っただけであって、買い物ぐらい来るさ」

一「そうか、じゃまた別の場所で」

リ「ああ、そうだな」

そう言っで一夏達は歩き出した

俺はラウラ達に近づいた

リ「そんなにこそそとしていると不審者だぞ、お前ら」

もちろん後ろから

全「なっ!？」

ラ「兄上！驚かささないでください!」

鈴「そうよ！まったく」

セ「リヨーマさん、どうしてここに?」

リ「買い物に来て何が悪い」

箒「なぜ私たちがここにいます?」

リ「丸見えだからな、お前ら」

見えないのは一夏達がさっきいた場所ぐらいだ

リ「つけるのはいいが、お前らが怒ることぐらいしか起きんだらう

な

全『・・・・・・・・』

リ『俺はいく。お前ら程々にな』

ラ『兄上。私もついて行きます』

鈴『ラウラ！なに逃げてんのよ』

ラ『確かに嫁の行動も気になるが久しぶりに兄上と一緒に買い物
したいのだ／＼』

鈴、セ『（さすがブラコン、一夏さんよりそっちが優先とは）』

リ『お前ら行かなくていいのか。もう一夏達いないぞ』

鈴『な！ほんとだ』

セ『逃がしませんわ！って箒さんがいない？』

ラ『嫁の後をつけていったぞ』

セ、鈴『抜け駆けとは！！』

二人は全速力で走って行つた

ラ『さあ兄上行きましよう』

リ『そうだな』

俺たちも本格的に買い物満喫し始めた

（水着売り場）

なにやら女子の試着室あたりがうるさい

リ、千『どこの馬鹿が騒いでるのやら』

なぜか近くに織斑先生と山田先生がいた

リ『これは奇遇ですね、千冬さん』

ラ『教官も水着を？』

千『教官と呼ぶなといったはずだぞ、ラウラ。そうだ、ここ最近着
てないからな。いっそのこと勝手しまおうと思つてな』

山田先生は私服だが千冬さんはスーツのままだ

リ『千冬さん、その恰好では男も寄つてきませんよ』

千『お前に言われたくないし、第一寄つてくる男など興味がない』

リ『なるほど。そういえば一夏とシャルロットがここらへんにいる

はずですから探してみてもどうです』

千『そうか、ならそうしよう』

千冬さんはすたすたと試着室の方へ歩いて行った。さすがブラコンセンサーでもあるのかと思うぐらいの迷いのなさだ。

リ『さて、ラウラお前はどんな水着がいい』

ラ『兄上が選んでくれるのですか？』

ラウラは恥ずかしいような嬉しいな感じでそわそわしている

リ『一夏が見惚れるようなものを選んでやる』

ラ『なっなんと』

ラウラは顔を真っ赤にして答える

リ『さてと、どれがいいかな・・・』

そうやって水着を選んできると

『ちよつとあんたこれ片づけて』

女性が俺に水着を渡そうとしてきた

リ『調子にのるな、自分で片づける』

『あんた、立場が分かっていないようね』

そうやって女性は店員を呼ぶ

ラ『兄上、大丈夫でしょうか』

リ『立場はこちらが上だぞ。なぜなら後ろはIS学園だからな』

ラ『確かにそうですね』

店『あなたですか、どこの学生で？』

リ『IS学園だ』

店『！！それは失礼しました。』

店員は女性に説明すると女性は青ざめて逃げて行った

リ『ばかな女だ、男尊女卑でもあんなこと誰もしなかったぞ』

そんなことをしていると試着室の方から山田先生の悲鳴のような声が聞こえた

かすかに一夏の声も・・・

リ『これがいいかな、どうだラウラ』

ラ『こっこれは・・・似合うでしょうか／＼』

リ『似合わないなら選んでないな』

シ『やぁリヨーマ、ラウラ』

声が出た方を向くとハーレムガールズがいた

リ『シャルロット、一夏はどうした』

シ『織斑先生と買い物だった』

リ『なるほど、これラウラに似合うだろ』

シャルロットに水着を見せた。

シ『確かにラウラに似合うと思うよ。可愛いし』

篤『確かに』

セ『誰が選んだので？』

リ『俺だが』

鈴『・・・なんか軽く悔しい』

リ『というわけだこれにするか、ラウラ』

ラ『でっでは』

リ『よし、では買うか』

ラ『兄上、これまでの買い物も全部兄上もちでしたのでこれは私が』

リ『いいから、今日は俺持ちだ、久しぶりに兄貴させてくれ』

シ『そうだよ、甘えてもいいんじゃない？』

ラ『では、お願いします』

（寮内）

リ『おつかね、一夏』

一『別に疲れてはないかな』

リ『千冬さんの買い物に付き合ってきたんだろ』

一『でも水着だけだったし』

リ『お前の事だ、白か黒かで黒がいいけど、ごまかして白って言う』

たのに見抜かれて結局黒にしたんだろ』

一『見てたかのようなってみてただろ』

リ『いや、しらんが』

適当に言ったら当たるとはな

リ『さて、臨海学校は来週だったな』

一『そうだな、リヨーマは水着あるのか？』

リ『買ってきた』

一『そうか。お休み』

やれやれ、こいつはどこでも台風を巻き起こすな、まったく
臨海学校か・・・若干の嫌な予感がするな

一夏の周りは暴風地帯（後書き）

こんな感じでした

次はいよいよ最後のはなしですね
でも番外編をいろいろ出します

「兄上の一日観察日記」 著リウリウ（前書き）

今回は番外編です

ついでに今回から書き方を変えてみます
では、どじぞ

「兄上の一日観察日記」 著ラウラ

（リヨーマ視点）

『なんだこれは』

俺はラウラに用事があったのでラウラ達の部屋に行った。

しかし、実際ラウラがいなかったので待つことにした、シャルロットがお茶を淹れている間にラウラの机を見た際に「兄上の観察日記」というタイトルの本が目に入った

『ラウラ、見るぞ』

『いいの？勝手に見て？』

シャルロットがお茶を持ってきた。

『俺の観察日記だそうだからいいだろ』

『いいのかなあ？』

適当にページを開いて黙読した

（ラウラの日記）

某月某日晴れ

兄上、朝五時起床

（いつから観察してるんだ）

室内で筋トレを開始、腹筋、背筋、腕立て伏せを各100回
五時半、ISスーツに着替えてグラウンドに移動

グラウンドで素早くストレッチをする

その後八時まで、五キロのグラウンドをひたすら走り続けていた

一周を20分で、二時間は120分だから六周、つまり三十キロ・

・すごい体力だ

さすが兄上

(すごいのか、当たり前だと思ったが)

八時半、授業開始、兄上は授業を聞いてるようでもまったく聞いていない

そういう私も観察で授業が出来ていない

(何をしたいんだ、ラウラは、勉強を優先しろ)

十二時、今日の兄上の昼はチャーハンだった

兄上は最近中華にはまっているのかラーメンやチャーハンなどを食べている

(別にいいだろうが)

一時、授業の様子は午前と同じ

放課後、第三アリーナで一夏VSセシリア、鈴の模擬戦(という名のイジメ)をしている

『一夏さん!!今日という今日は許せませんわ!!』

『なんで?俺何かした?』

『はあ?あんた自分がなにをしたのか分かんないの?』

『わかるかあ!説明もとむ!!』

ちなみに兄上は観客席で観戦している

私は兄上の隣で見ている

ちなみに原因は私が一夏（嫁）の布団で寝ることである

『さつさとくたばりなさい！！』

セシリアはスターライトMK？を構えて一夏に叫ぶ

それと同時にブルーティアーズも展開する

『なあ！それはさすがに死んでしまっ！！』

とかいいつつ一夏（嫁）は回避行動を続けている

兄上はいつもの無表情で一夏（嫁）の動きがああだ、こうだと言っている

寮内、八時、兄上は再び筋トレを始める回数は朝と同じ

一夏（嫁）はそんな兄上を毎回化け物のような目で見ていたしかに兄上は化け物じみているが化け物ではないぞ

（あんまりフォローできてないな）

その後、ストレッチを開始する

それが終わるといつもの全国料理集を読み始める

十一時、睡眠

とこんな感じで兄上は日々を過ごしている

（リョーマ視点）

『ふむ』

『兄上どうしたのです・・・か。そっそれは！』

ラウラが日記を奪おうと飛び掛かってくるが受け流して関節を決める

『いつ、痛いです兄上!!ギブ!ギブ!』

『ほう、いつの間にギブなんて言葉を覚えたんだ、ラウラ』

とか言いつつラウラを放す

『シャルロット!なぜ兄上にこれを読ませたんだ!』

『リョーマが勝手に読みだしたんだよ』

『俺の観察日記だろ、なら読んでも別にいいだろ』

『兄上、用事があったのでは?』

『そうだ、実は明日買い物に行こうと思ってな、お前もどうだ』

『もちろん!行かせてもらいます!』

『それ僕も行つていい?』

シャルロットか・・・

『別に問題ない』

『ありがとう』

『・・・・・・』

ラウラは少し不機嫌だ

『そうだ、一夏も誘つか』

『えっ』

ラウラにこっそり耳打ちする

「もし俺と一緒に買い物に行きたいのなら、一夏をシャルロットにあてることが出来るぞ。ましてや他の奴らも誘えば進展もしないだろっしな」

「なるほど、さすが兄上そこまで計算を」

『なにこそ話してるの?』

『いや、ちよっとな』

『そう』

シャルロットは一夏が来ることでデートでも想像しているのか嬉しそうに明日の支度を始めた

『さて、俺は戻るぞ』

『うん、お休み』

『おやすみなさい、兄上』

そういえば、いつから観察日記を書き始めていたんだろう
日記をつける必要があったのか
まあいいか

「兄上の一日観察日記」 著ラウラ（後書き）

こんなものを書いてみました

さて今回書き方を変えてみました

とある感想で以前では見にくくと言われたので

さてこれ読んで感想をくれたらうれしいです

それでは

穏やかではない臨海学校（前書き）

臨海学校で最終回って前に言ってたけど
小説手に入って書けるのでまだまだ続きます
どうぞ

穏やかではない臨海学校

（リョーマ視点）

『海っ！見えたあっ！』

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる
臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は
穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた

『おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ』

そうつぶやくのは俺の前の席である一夏だ

『う、うん？そうだねっ』

一夏の隣の席を見事勝ち取ったシャルロットだったが、出発してか
らずと上の空である

『それ、そんなに気に入ったのか？』

『えっ、あ、うん！まあ、ね』

前の席だから見えないがおそらくこの前の買い物でシャルロットに
何かプレゼントしたんだろう

『まったく、シャルロットさんたら朝から偉くご機嫌ですわね』

一夏たちの通路を挟んで向こう側、セシリアがむすっとした顔で言
ってくる

一夏も馬鹿な奴だな、見る、箒とラウラが黒い
でも二人とも、なんだかそわそわしている
そんなに水着が恥ずかしいか、一夏に見せるのが

『そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ』

織斑先生の言葉に全員が従い一気に静かになる

『今日から世話になる花月荘だ。従業員の仕事を増やさないように
注意しろ』

『『』』よろしくおねがします』』』

織斑先生の言葉に続いて全員で挨拶をする、そしていつもお世話に
なっているとこのことでの女将さんの登場。

『はい、みなさんよろしくお願ひします。今回の一年生の皆さんは
元気のよい方ばかりで。』

そして全員が旅館に入っていく中、俺と一夏と視線があつた。

『あら、あなた方が』

『ええ、今回初めての男子となります。お前ら挨拶をしる』

『初めまして、織斑一夏です』

『あら、弟さんですよね？』

『ええ、まあ不出来な弟ですがね』

『つぶふ、千冬さんは弟さんには厳しいのねしっかりしてるように
見えるのに。それでそちらのかたは？』

そして俺の方に視線が向けられたので

『リヨーマ・ボーデヴィツヒです。』

『お願いしますね』

挨拶が終わり織斑先生に連れられて部屋の前に来る

『織斑先生？』

『どうした織斑』

『部屋に俺たちと先生の名前がありますが・・・』

『同じ部屋だから当たり前だろ』

一夏の場合はハーレムガールズが来るから分かるがなぜ俺まで

『一応だ』

『一応ですか』

相変わらず人の心を読むのがお上手だ

〜海〜

『いや〜いい景色だな〜』

『久しぶりだな、海は』

俺も一夏も海パンだけである

『一夏、ずいぶんとほっそりしてるな、筋肉しっかりとしているのか』

『リヨーマに比べたらないけどそれなりには鍛えてあるよ』

何て他愛無い話をしていると

『一夏!!--』

『うぐっ!鈴か?降りろよ』

鈴が一夏に飛びつき肩車状態になっている

『やだよ〜下りないもんね!』

子供だな、見た目通り

『鈴さん!何してるのですか!』

セシリアも駆けつけてきた

『いいじゃない、別に何しようとも』

『いいわけないですわ!(羨ましい)』

しびしび鈴は一夏から降りた

ついでにほかの女子も集まってきてきゃあきゃあ騒いでいる

『一夏さん!オイルを塗って下さい』

『おっおっ』

セシリアは一夏にオイル塗を頼んでいた

『一夏、オイルは塗る前に掌で温かくしてから塗るんだぞ』

『そうなの?』

『ああ、そうしないとあまり意味がない』

俺はそれだけ言うと海に潜りに行った
海はいい感じに深く冷たく夏の暑さに対抗していた
もっとも暑さ寒さはあまり感じないから意味ないが
しばらく泳いでいると近くを船が通って行った乗組員がやたらとあ
ちこちを見回して警戒しているからよからぬことをしているようだ
が何分証拠がないここは退いておこう
後ろを向くと浜がものすごく遠かった
10キロはあるだろう、泳ぎ過ぎたな

帰ってくる途中浜から少し離れた海岸に箒がいた

『何してるんだ、あいつは』

まあ事情があるんだろう

浜に戻ると一夏達がビーチバレーをしていた

ラウラがその少し横で伸びていた

何があったんだ、顔が赤いな・・・一夏に水着を褒められて浮かれ
たところにボールでも当たったか

『リヨーマー！お前もやろうぜ』

女子の顔が若干青ざめる

『いいだろう、ただしお前の敵だな』

『まじで！？』

ついでに織斑先生も来て大変なことになっていた

く大食堂く

『セシリア、そんなに我慢することか』
『我慢することですわ』

セシリアは俺の隣そのセシリアの隣は一夏である

『セシリアいいな〜男子二人に挟まれて』

何て言ってる女子がいるがセシリアはただ一夏の隣に座りただけだ
でも正座に慣れてないセシリアは相当きつそうだ
ちなみに一夏の反対側はシャルロットである

しばらく三人でぎゃあぎゃあ騒いでると

『貴様らは静かに飯を食えんのか？』

織斑先生の一言で一夏達は一気に静かになる

『リョーマさんは足が痛くならないのですか？』
『スパイ活動をするかもしれないからさまざま動作をたたき込ま
れている』

『スパイって・・・』
『実際しなかったがな』

俺は刺身を一口

『箸も随分上手に使うんですね』
『まあな』

『ふ~~~~~』

シャルロットが何か悶えている

『一夏、何があった』

『シャルがわさび一気に食った』

『何してるんだ、シャルロット』

シャルロットはしばらく復帰できなかった

〈部屋〉

『織斑、久しぶりにマッサージしろ』

『マッサージとは』

『俺マッサージ上手いんだよ』

そしてマッサージを一夏は初めた

相当気持ちがいらいらしく艶やかな声を織斑先生は上げている
・・・おや、外に人の気配・・・しかもハーレムガールズか

『先生、外』

『うん？リヨーマ』

襖に顔を向ける開けると言うことが

ガララ

『『『『『きやああ』』』』』

『何してる、お前ら』

『べべべ、別に何もしてませんわ』

『そうよ！ただ部屋の前にいただけよ』

『襖に顔近づけてか』

全員顔から床にぶつかっていた

『一夏、お前はいったい何をしていた!』

『何って、マッサージだけど』

『『『『『『マッサージ?』』』』』』

『一夏、お前風呂に入ってこい』

『えっ、あ、はい』

一夏は風呂に入り部屋を出て行った

『リョーマジュース出せ』

『はいはい』

俺はみんなにジュースを、織斑先生にビールを渡す

『気が利くな、リョーマ』

『やれやれ、どうせ飲む気でしょ千冬さん』

『『『『『千冬さん??』』』』』

『ここでは』

『ビールを勤務中に飲む教師は失格だと思えますが』

『ぬっしまった、はめられたか』

今更か、遅いな、ついでにみんなも気が付いた

『まさか、これ』

『そっだ、さて、直球に聞こうか』

一夏についてだろうな

『お前ら、一夏のどこに惚れている？』
『『『『『ぶほっつ！！』』』』』

汚いな、ジュースを吹くな

『わ、私は・・・その・・・ち、小さい頃より腕が上がったのが良
いと言うか・・・』

と、恥ずかしそうに、モジモジしている。 幕

『あたしは・・・えっと・・・より男前になっているがいいなあ・・・
』て』

モゴモゴさせて、小さい声で言う鈴

『わ、わたくしは・・・なんて言えばいいんでしょう・・・か、格
好いいからでしょうか・・・』

さらに鳳よりもモゴモゴさせて喋るセシリア
何で女子たちの告白を聞かされてるんだ俺は

『・・・そうか』

千冬さん・・・なんだその嬉しさ半分寂しさ半分の顔は・・・やっ
ぱりブラコンか

『僕 あの、私は・・・優しいところ、です』

ぼつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹に真

摯な響きがあった。

『ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ?』

『そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ』

シャルロットは照れ笑いをしながら熱くなった頬をぱたぱたと仰ぐ、四人はその様子を羨ましいのか悔しいのか、じいーっとシャルロットを見つめた。

『で、お前は?』

さつきから一言も話していないラウラに、千冬さんが話しかけるとビクツと身をすくませながら言葉を紡ぎ始めた。

『つ、強いところが、でしょうか……。』

『あいつはリヨーマに比べたら断然弱いぞ』

『……。そうですが、自分にはない強さが……。あるので』

ベッキッ!!

失礼、俺がスチール缶を握りつぶした音だ、気にするな

『あいつは、家事全般が出来るし、マッサージも上手い、付き合える女は得だな。欲しいか?』

『『『『『くれるんですか!?』』』』』』

『やるかバカ』

千冬さんがそう言うと、女子一同はええ〜……。と声なき突っ込みが聞こえた気がした。

『女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする、ガキども』

誰から、どう奪った、別に誰かの男でもないし

『リヨーマ』

『なんです、千冬さん』

『お前は、ラウラが一夏を好きだと知っているが何とも思わないのか？』

『もう答えは出てますよ』

俺は板になったスチール缶を見せる

『相当だな・・・これは』

『まあこれはラウラの事ですからそこまで干渉はしないですよ・・・よほどのことがない限り』

『その余程がないことを願うぞ』

千冬さんは死にかねんと口だけで呟いていた

『そういえば、兄上』

さっきの俺と千冬さんのやり取りを聞いて若干真っ青になっていた女子たちだったがラウラがいち早く元に戻り質問をしてきた

『なんだ、ラウラ』

『兄上は教官といつ知り合ったので？随分仲がよろしいようですが』

『『それは気になってい（ましたわ）（たよ）（たのよ）（ぞ）』』』』

『第二回モンドグロツソの時だが』

『だが、それつきりだぞ？』

『そうなのですか』

『さて、お前ら、もう部屋に帰れ』

その言葉でこの場は解散した

く次の日く

ちなみに二日目はISの武装試験運用の日であるので専用機持ちは異常に大変だ。と、言うことで専用機持ちは他のやつらと違う場所で行われることとなっている。俺と一夏のは拡張領域がない、だから暇である。そして織斑先生が前に立ち

『それでお前らは専用機持ちだ』あのう、『うん？なんだオルコッ

ト

『箒さんは違うのでは』

『ああ、その件か。それは』ちーちゃんああああああん！！』・・・
・あの馬鹿』

森から勢いよく何かが走ってくる

声からしてあの人しかいないが・・・

『やあ、会いたかったよちーちゃん。さあハグハグしよう、一緒に愛を・・・痛いよ、ちーちゃん』

森から勢いよく出てきたのは東博士だった。その後高く飛び上がったが見事織斑先生のアイアンクローで頭を抑えられている。

『なぜここにいたので、東博士』

『おおっ！りっ君！ほんとに久しぶり！いや〜男前になったね〜』

『東博士は相変わらずで』

東博士は俺の返しに嬉しそうに笑顔を作る
その後幕の元に行き

『やあ!』

『・・・どうも』

『ほんと久しぶりだねえ、こうして会うのは何年ぶりだろう。ほんと大きくなったねえ篝ちゃん、特におっぱいが』

がんっ!

『殴りますよ』

『殴ってからいったよ、リっ君、篝ちゃんがいじめるよ』
『俺に助けを求めないでください』

そしてこんな俺らのやりとりには一同はポカーンとしている状態であった、そんな時

『あ、あのうこの合宿では関係者以外立ち入り禁止の』

『これは、珍妙奇天烈なこと言うね。ISにおいての関係者は私をおいて他にいないよ』

『そ、そうですね』

山田先生ですら撃沈、大体この人を止めようなんて千冬さんぐらいだ。

『おい、東。自己紹介ぐらいはしろ。私達以外の生徒が驚いている』
『ええ、面倒だな。私が天才東さんだよ、よろしく。はい終わり』

そして全員がこの人があの篠ノ之東だと分かると全員が驚愕した、まあこれがあのISの生みの親だとは俺も言いたくはない。しかし

これだからこそそのISなのかもしれない。

『・・・それで頼んでいたものは・・・』

篤がそう言つと東博士は待っていましたとばかりに眼を光らせて、
そして上を指差して

『カモーン』

そう言つと上空から銀色の正方形の物体が落ちてきた

『じゃ、じゃーん、これこそが篤ちゃんの専用機！その名も『紅椿』
(あかつばき)！現在存在するISのスペックを凌駕する束さんお
手製のISだよ！』

『げ、現在のISを凌駕するだ・・・』

ラウラがそう口にした、それは簡単言えば最新鋭にして最高性能の
ISということだ。しかもこの紅の色が眩しいほどに綺麗であった。

『でも、この束さんが造つた現在のISだけどね』
『どづいづいことですか？』

一夏が代表して質問する

『りっ君が造つたりっ君の専用機シュヴァルツエア・オルカーンこ
れはさすがの束さんでも超えられないよ』

『そんなにすごいのかリョーマのISは』

『10年間も研究してたからな、まあ、東博士より進んでは思
わなかったが』

『それじゃあ篝ちゃん、フィッティングしちゃうおつか。それじゃあリッ君サポートよろしく』

俺は言われて紅椿の後ろに回り、篝が乗った事を確認すると、俺はコンソールを開いた。

『おお、篝ちゃんまた剣の腕上達したんだね。うんうん、お姉さんとしても鼻が高いよ』

『……』

『無視されちゃった、けどいいもん。それでリッ君どう？』

『武器データ転送しますよ』

『うん、お願いね』

そしてものの一分で終了。

『う、うそ……ですよね、織斑先生。ISの最適化だけでも手動でやれば十分はかかるのに』

『いやあくリッ君のおかげで三分のところ一分で終われたよ。うんうん、さすがこの束さんが認めた天才』

『三分で終わっただんなら手伝う必要あったのですか』

『うんうん、もちもち。それじゃあこれでOK あとは自動処理にまかせてパーソナライズするだろうし、それじゃあいっくんのみみしてくる、束さん興味津々なんだよ』

そう言つと一夏はすぐに白式を呼び、束姉はデータをよび、さっきと同じようにしている。

『ふーん、奇妙なフラグメントマップになっているね、やっぱり男の子だからかな?』

やはりフラグメントマップは通常ではないらしい、ちなみにフラグメントマップとはISの自己進化の道筋、人間でいうところの遺伝子である。

『あのう東さん、俺なんでISに乗れるんですかね?』

『うーん、わかんないな』

『あのう、それとこいつって後付武装ってホントにないんですか?』

『うん、だってこれ私が作ったわけだし。そういう風にしたんだよ、そしたらなんと第一形態から単一仕様能力が出来たんだな、さすが私』

『え、これって東さんがつくったんですか?』

『そうだよ、おっ!おわったみたいだね』

そう言うと、紅椿の設定は終了しており箒がISの手を握ったり、開いたりしていた。

『お、できたようだねえ。それじゃあ試運転もかねて箒ちゃん飛んでみて思い通りにうごくだろうから』

そういうと箒は紅椿を空中に上げた、相当の速さだなたぶんラウラのあの眼で戦ってやっどぐらいだろう。

『どつ、紅椿は?箒ちゃんが思っている以上に動くでしょう』

『・・・はい』

現在オープンチャンネルでの会話なので俺らも聞いている状態だ。

『それじゃあまずは武器のデータを送るよ』

そして上ではそのデータを向け取った筈が二本の刀を抜き構えた。

『それじゃあ次に武器の解説をするよ、まずは右のが『雨月』、これは対一用の武装で刃部分からエネルギー刀を放出し、相手を蜂の巣にできるはずだよ、そして左にあるのが『空裂』、これは対集団用の武装でこれの場合には斬撃の範囲を自動で展開してそのエネルギー刀を放出する武器だよ、それじゃあ使ってみよう』

東博士は言うや否やミサイルを発射するボタンを押した
海面からいきなりミサイルが飛んできた

『これでも・・・この紅椿なら！』

筈は一瞬でミサイルを落として見せた
しかし

『緊急事態だ、篠ノ之降りてこい』

先生の声から相当緊急なんだろう

俺たちはのちにそれを体験することになる

穏やかではない臨海学校（後書き）

こんな感じですよ

ありがとうございました

羽はたく「紅」 墜ちる「白」(前書き)

今回は一夏が福音に落とされるといまでです
どしどし

羽ばたく「紅」 墜ちる「白」

（リヨーマ視点）

緊急事態の内容はこうだった

- 1．アメリカ、イスラエル共同で造られたIS「銀の福音」（シルバリオ・ゴスペル）が原因不明の暴走
- 2．その福音がしばらくするとこの海域にくる
- 3．なので俺たちで対処しろ

とのことだった

『織斑先生、福音のデータ、見せてもらえますか』
『構わん、これだ』

・・・なかなかハイスペックな機体だな、最高速が2650キロとはな・・・俺のオルカーンの方が速い
しかしこの銀の鐘は厄介シルバリオだな、全砲身36門の同時展開による攻撃か

『リヨーマ、お前には今回大佐として私と同等の権利と今回の作戦で指揮に徹底しろとの指示が来ている』

『・・・わかりました』

一夏達だけでどうにかなるのか・・・わからんな

『これだけの武装となると長期戦は厳しいね』

『一撃撃破ということだな』

シャルロットとラウラが話を始める

『ならば、一夏の零落白夜が一番か』

『しかし、福音に気付かれず接近するには相当の速度がいるぞ』

『ならば私の強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」がありますわ』

『では、それを「ちょっと待った」・・・束か』

『ちょっと待つんだちーちゃん！この束さんにとっておきの作戦があるんだよ！！』

『作戦だと？』

・・・そうか、今回もか、今回も貴方の仕業か

束博士は一回俺を見てにやりと笑う・・・確信した、この人だ

『紅椿なら換装^{パッケージ}装備無しで高速移動できるんだよ』

『で、ですが』

『オルコット、それはインストールしてあるのか？』

『・・・しておりません』

『ならば、束の作戦でいくか・・・気がのらんが』

『織斑先生、緊急事態なのでそのような言葉はあまり言ってもらいたくはないのですが』

『そうか・・・すまないな』

『なあ、シャル』

『なに？一夏』

『リヨーマの顔ってさ』

『うん、まるで軍人だね』

『当たり前だろ、兄上の階級は大佐、さまざまな戦争、紛争を収め何万の兵を束ねてきたんだぞ』

『同年代とは思えないな、それ』

聞こえてないつもりだろうが、ばつちり聞こえてるぞ

『では、織斑・篠ノ之2名による目標の追跡及び撃墜、作戦開始は30分後。各員、ただちに準備にかかれ』

織斑先生の合図で皆が動き出した

（一夏視点）

どうしてこうなったんだ、なんで俺がこんな作戦を・・・
一撃必殺作戦何て・・・はつきり言ってるリョーマなら絶対勝てるだろうでも、仕方ない切り替えよう

『じゃあ、箒。よろしく頼む』

『本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ』

作戦上、移動のすべてを箒に任せるので、一夏は箒の背中に乗っかる形になった。

『それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？』

『ああ、そうだな。でも箒、先生達が言ったけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるか分からない。十分に注意をして』

『無論、わかっているさ。ふふ、どうした？怖いのか？』

『そうじゃねえって。あいな、箒』

『ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいい』

『・・・・・・・・』

一夏はどうにもすつきりしない不安をかかえたまま、紅椿の背中へと乗った。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか?』

ISのオープン・チャンネルから千冬の声が聞こえる。

『織斑、篠ノ之の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける』

『了解』

『織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか?』

『そうだな。だが、無理はするな。お前は紅椿を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るともかぎらない』

『わかりました。できる範囲で支援をします』

篝のそれは一見落ち着いた返事のようにだがやはり口調は喜色に弾んでいた。

『一夏』

『どうした、リヨーマ?』

オープン・チャンネルからプライベート・チャンネルに切り替わりリヨーマの声が届く。

『篝は浮かれていていささか危険だ、もしもの時はお前がフォローしろ』

『分かった、行ってくる』

俺たちは福音に向かって飛び立った

（リヨーマ視点）

『織斑先生、俺の出撃の許可を』

『出せると思ってるのか？』

『箒のあの浮かれ具合は問題です』

『・・・忘れてるのか？お前は私と同じ立場だ』

『・・・行つて来ます』

海岸にて・・・はるか遠くで爆発が見える
いくか

『兄上』

『どうした、お前たち』

『我々も連れて行つて下さい』

『断る、俺一人で充分だ』

『何だよ！』

『今は、一夏達の回収だから、そんなに人数はいらん』

『うっ・・・』

沈黙したラウラ達を無視して俺は飛び立った

『見つけた・・・これは』

一夏が銀の鐘の攻撃を受けて海に落下しているところだった

『一夏・・・一夏』

『箒、放心してる場合じゃない一夏をさっさと回収しろ』

『・・・！ああ、分かった』

『貴様の処罰は帰ってからだ、かくごしておけ』

『・・・ああ』

『くだらん、力に溺れるなど』

『・・・！！』

俺は、福音に向けて、ヴィント・シュトウースを放ち距離をとらせた

『帰るぞ、箒』

『分かった・・・一夏』

福音は追ってはこなかった

羽ばたく「紅」 墜ちる「白」(後書き)

こんな感じですよ

今回は時間をかけてお送りします

もう一つ俺が書いたIS 緑を纏うもの もよろしく
ありがとうございました

舞う「黒」甦る「白」(前書き)

今回で臨海学校編終了です
どしどし

舞う「黒」 甦る「白」

（ 第視点 ）

『 …… 』

旅館の一室、壁の時計は四時前を指している

ベッドに横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないままだった。その傍らにいる私はずっとうなだれている

リボンを失って垂れた髪がまるで私の気持ちを表してるようだった

『 (私のせいだ ……) 』

一夏は先ほどの戦闘による怪我で体中に包帯が巻かれている

『 (私がしっかりしていれば一夏はこんな目には ……!!) 』

ぎゅゅつとスカートを握り締める、拳が白く色を失うほどに強く、強く握りしめた

『 (私は …… どうして、いつも ……) 』

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう

それを使いたくて仕方がない

わき起こる衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある

『 (何のためにいつも修行をしてきたんだっ ……!!) 』

どんなに後悔してももう遅いことなど分かってる

『（私は・・・もうISには・・・）』

一つの決心がつこうとした瞬間

『あー、あー、わかりやすいわねえ』

こちらに一切の許可なく鈴が入ってきた

『・・・・・・・・』

『あのさあ、一夏がこうなったのって、アンタのせいなんですよ？』

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっている

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、同時にISの除を深く受けた状態になる
それ故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませなくなってしまうのだ

『・・・・・・・・』

『で、落ち込んでますってポーズ？　　っざけんじゃないわよ！』

突然烈火のごとく怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままの私の胸ぐらを掴んで無理やり立たせる

『やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！』

『わ、私・・・は、もうISは・・・使わない』

『ッ　　！！！！』

バシッ！

頬を打たれ、私は支えを失い床に倒れる

『甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは』

鈴の瞳が私の瞳を直視する

そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情

『戦うべきに戦えない、臆病者か』

その言葉で私の心の奥の闘志に火がついた

『ど……。』

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる

『どうしろというんだ！もう敵の居場所も分からない！戦えるなら、私だって戦う！』

言葉だけではない、これは私の気持ちだ

『やっとやる気になったわね、……。あーあ、めんどくさかった』

『な、何？』

『居場所なら分かるわ。今ラウラが』

言葉の途中でドアが開く。そこには真っ黒な軍服に身を包んだラウラが立っていた

『出たぞ、ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で確認したぞ』

ブック端末を片手に部屋に入ってくるラウラを鈴はにやりとした顔で迎える

『さすが、ドイツ軍特殊部隊。やるわね』

『ふん……。お前の方はどうなんだ。準備は出来てるのか』

『当然。シャルロットとセシリアはどうなの』

『ああ、それなら』

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた

『たった今完了しましたわ』

『準備オツケーだよ。いつでもいける』

専用機持ちが全員そろつと、それぞれが私を見る

『で、アンタはどうするの?』

『私は……。私は』

ぎゅつと拳を握る。しかし今度は後悔ではない!

『戦う……。戦って勝つ!今度こそ負けはしない!』

一夏の仇とらせてもらおう!!

『決まりね、作戦は筈を入れるBでいいわね』

『ああ、あとは行きながら確認だ』

全員がドアに向かうがドアがいきなり開いた

『どこに行く気だ、大馬鹿者共』

ラウラとほぼ同じ黒の軍服をきたリヨーマが相変わらずの抑揚のない、声で言った

（リヨーマ視点）

『もう一度言おう、どこに行く気だ』

『決まってるでしょ、福音のときよ』

『作戦が決まるまで待機といわれたはずだ』

『作戦なら私達で決めましたわ』

『実践をほとんど知らない小娘達の作戦か・・・反吐が出るな』

『それでも・・・反吐が出るような作戦でも僕達はやるよ』

『そうだ、一夏を傷つけられて黙ってられるものか』

『たとえ、兄上でも・・・邪魔はさせません』

・・・なかなかいい目をする

だがまだぬるい

『邪魔はさせないか・・・なら』

俺は戦闘態勢をとり殺気を飛ばす

数多の戦争を潜り抜けるうちについたものだ

威嚇の殺気ではない、殺すための殺気

ラウラたちは汗をかきながらも俺に向かう

『ふふっ』

『『『『『えっ?』』』』』

『ふふふ、はははははは』

俺はラウラたちが面白く「笑って」しまった

『はははは、いいだろ、俺もついていってやるっ』

『あ、兄上?』

『俺は織斑先生と同等の立場だ、つまり、おれが作戦を考えたという
うことにしておけばお前らは怒られずにすむ』

『試したってわけ?』

『まっつて、鈴それもあるけど・・・』

『兄上、今「笑い」ましたよね?』

『・・・!そういえば・・・そうか、これが・・・』

感情か・・・ふっかなかないものじゃないか

一夏・・・お前はまだまだ強くなる

だから、はやくかけ上げれ次へと

奴は膝を抱え丸くなっていた

『作戦、開始』

俺はそう呟く

ラウラはカノンを福音に向けて・・・放った
超音速で砲弾は福音に向かい直撃する

『初弾命中。続けて砲撃を行なう』

福音から五キロ離れた場所に浮かんでいるIS「シユヴァルツェア・レーゲン」とラウラは、福音が反撃にうつるよりも速く次弾を発射した

その姿は通常装備と大きく異なり八〇口径レールカノン《ブリッツ》をそれぞれ肩に装備している

『（敵機接近まで・・・四〇〇〇・・・三〇〇〇　くっ！予想よりも速い！）』

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る

その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を打ち落としながらラウラへ接近していた

『ちいつー！』

砲撃仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい

対して、機動に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた

『セシリアー！』

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる青一色の機体　強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備した『ブルー・ティアーズ』によるステルスモードからの強襲だった

『敵機Bを認識。排除行動へ移る』
『遅いよ』

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった

シヨットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩すが、一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して銀の鐘による反撃を開始した

『おっと。悪いけど、この「ガーデン・カーテン」は、そのくらいじゃ落ちないよ』

リヴァイブ専用防御パッケージは実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ

防御の間も得意の高速切替でアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する

『・・・優先順位を変更。現状からの離脱を最優先に』

全方位にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間全スラスタを開いて強行突破を計る

『させるかあつー!!』

海面が膨れあがり、爆ぜる

飛び出してきたのは「紅椿」とその背中に乗った「甲龍」だった

『離脱する前にたたき落とす!』

福音へと突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パツケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設した二つの砲口がその姿を現す。計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた

『！！』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも、福音に勝とも劣らない弾雨。増幅された衝撃砲　言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった

『やりましたの！？』

『まだよ！』

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させてはいなかった

『銀の鐘最大稼働』

『開始』

両手をいっばいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。

刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった

『くっ！！』

『第！僕の後ろに！！』

前回の失敗をふまえて、紅椿は機能限定状態にある。展開装甲を多用したことから起きたエネルギー切れを防ぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定し直したのだった

もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからこそである。集団戦闘の利点を最大利用した役割分担であった

『それにしても・・・これはちょっと、きついね』

防御専用パッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受け続けるのは危うかった

そうこうしている間にも物理シールドの一枚、完全に破壊される

『ラウラ！セシリア！お願い！』

『言われずとも！』

『お任せになつて！』

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアが左右から射撃を開始する

『足が止まればこつちのもんよ！』

そして直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。狙いは、頭部に接続されたマルチスラスタ―銀の鐘

『もらったあああつー！』

エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の攻撃は止まらない
同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った

『はっ、はっ・・・！どつよ　ぐッー！？』

片側だけの翼になりながら、それでも福音は体勢を立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩きこむ。脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へ墜すとす

『鈴！おのれっ　　！！』

箒は両手に刀を持ち、福音へと斬りかかる

その急加速に一瞬反応を失った福音の、右肩へ刃が食い込んだ

『（獲った　　！！）』

その思った刹那、左右両方の刃を手のひらで握りしめる

『なっ！？』

刀身から放出されるエネルギーで装甲が焼き切られるが、お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げ、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた

『箒！武器を捨てて緊急回避しろ！』

しかし、箒は武器を手放さない

『（・・・ここで引いて、何のための・・・）』

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた

『（何のための力かっ！！）』

エネルギー弾が触れる寸前にぐるんと一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲からエネルギー刃を発生させる

『はあああつー!』

かかと落としのような格好で残った片翼を切り落とし、海面へ墜ちていった

『はっ、はあつ、はあつ・・・!』

『無事か!?!』

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、篝は呼吸をゆっくりと落ち着けていく

『私は・・・大丈夫だ。それより福音は』

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその時、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ

『!?!』

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った「銀の福音」が自らを抱くようにうずくまっている

『これは・・・!?!? 一体、何が起きているんだ・・・?』

『!?!? まずい!?!? これは』 『第二形態移行』だ!』

ラウラの叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける

『キアアアア・・・!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる

『なにっ!?!』

あまりに速い動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる
そして、切断された頭部から、ゆっくりと、エネルギーの翼が生えた

『ラウラを離せえっ!』

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃
を行う

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められて止まった

『よせ!逃げろ!こいつは』

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩いほどの輝きと美しさを併
せ持ったエネルギーの翼に抱かれる
刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにさ
れてラウラは海へと墜ちた

『ラウラ!よくもっ・・・!』

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す。福音の
顔面へと銃口を当て、引き金を引いた

ドンッ!!

しかし、その爆音はショットガンのもではなかった

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした

『な、何ですの！？この性能・・・軍用とはいえ、あまりに異常な』

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。瞬時加速

それも、両手両足の計四カ所同時着火による爆発加速だった

『くっ！？』

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、セシリアは蒼海へと沈められた

『私の仲間を　よくも！』

急加速によって接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける

展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる

「うおおおおっ！！」

お互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押されはじめる

『(いける！これならっ)』

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし

キユウウウン……

『なっ！また、エネルギー切れだと！？　ぐあっ！』

その隙を見逃さず、福音の右手が箒の首を捕まえる
そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった

『ぐっ、うっ……！』

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる
福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと
進化した銀の鐘が紅椿の全身を包んでいた

『(ここまでか……。情けない……。)』

ぽつと光の翼が輝きを増していく、だが、箒たちの間を粒子が通る
福音は箒から手を離し距離をとる

『さつきから好き放題だな福音』

『リヨ、リヨーマ』

『下がれ箒、ここからは俺がやる』

箒は素直に下がっていく

『……ふっ、大切な友と妹を傷つけた罰、受けてもらっぞ、福音』

（ 篤視点 ）

ただ、眺めてることしか出来なかった

落ちていったみんなを拾い上げ、みんなで戦いを眺めていた

リヨーマは福音のスピードの着いていくどころかさらに速く福音を
圧倒していた

銀の鐘をマシンガンで打ち落とし、接近してきた場合はレーザーソ
ードで対応し圧倒し、蹴りや拳で殴り飛ばす
じわじわと蹴り殺しのように戦闘をしている

『リヨーマさんのあの戦い方・・・私の時よりひどいですわ』

『ていうか、福音以上のスピードって』

『銀の鐘も完全に防いでる』

『しかし、兄上は何を待ってるんだ？どうしてすぐに片付けないの
だろうか』

たしかにアレだけの性能差なら一瞬でかたがつくはずだ・・・

一旦思考を止める・・・すると私の頭の中にはただ一つのことだけ
が浮かんでいた

会いたい

一夏に、会いたい

すぐに会いたい。今会いたい

ああ、ああ、会いたい

『いち、か・・・』

『？篤？』

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた

『一夏……』

ただ……きて欲しいと

イイインツ……!!

『!?!』

後ろから音がして全員が振り向く

全員の視線の先には、白く、輝きを放つ機体がある

『あ……あ、あつ……』

じわりと目尻に涙が浮かぶ

わずかに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った一夏だった

『一夏っ、一夏なのだな!? 体は、傷はっ……!』

私は少し涙声で一夏に聞く

『おう。待たせたな』

『よかつ……よかつた……本当に……』

『なんだよ、泣いてるのか?』

『な、泣いてなどいないっ!』

ぐくぐしと目元をぬぐう、一夏は優しく私の頭を撫でる

『ちょうどよかったかもな。これ、やるよ』
『え……?』

一夏は持っていたものを私に渡す

『り、リボン……?』

『誕生日、おめでとうな』

『あ……』

『それ、せつかくだし使えよ』

『あ、ああ……』

『じゃあ、行ってくる。　　まだ、終わってないからな』

そついうと一夏はリヨーマの所へと向かった

『『『『ずるい』』』』

『なっ、だ、だったらお前らも誕生日にもらえばいいだろ!』

赤くなりながら私はそう言い放った

〈リヨーマ視点〉

『リヨーマ』

『一夏……来るのが遅すぎだ、馬鹿者』

『いきなり罵倒!?!』

『知ってたからな、さっさと終わらせるぞ』

俺はにやりと一夏に笑う

『えっ？リヨーマ今わら』
『くるぞ』

飛んできた銀の鐘をマシンガンで打ち落とす

『時間はかけん、一夏とどめはおまえだ』
『了解』

俺は最高速で福音に近づき福音の両腕を斬り飛ばす
福音は俺のほうを向いて銀の鐘を放とうとするがもう遅い

『これで！おわりだー！』

一夏が左手をかざして福音の頭を掴む
エネルギーらしきものがひかり一瞬視界が白くなる
目が慣れると福音は動いてはいなかった

『織斑先生、福音の撃破を確認』
『・・・そうか、ご苦労だった』

・・・これ、人乗ってたのか・・・危うく両腕斬り飛ばすところだ
つたな

接近するまで良く見えなかったがバイザーの下に顔が見えたのでギリギリで装甲だけ斬ったのだ

『さて、帰るぞ、貴様ら』

『今回は俺の指揮の下作戦を実行しました。なので、何も問題もあ

りませんよね、織斑先生』

『・・・ああ、ない』

『じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、リョーマくん。織斑君！？』

『ああ、俺はなんともないので、それと俺女子の裸興味ないんで』

『（ええっ何その返し方？というか、『脱いで』のあたりで女子がそれとなく自分の体を隠したのだが、若干傷ついたぞ）』

『そ、そうなんですか？それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ』

はーいと返事をして、俺たちはそれぞれにスポーツドリンクのパックを受け取る

『・・・』

『な、なんですか？織斑先生』

じーっと一夏を睨んでいたのも、一夏は居心地悪さからつい口を開いてしまった

『・・・しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな』
『え？あ・・・』

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられて表情は見えなくなる。さてと、部屋を出るとしよう。

『（仲間を、守れたよな。俺は）』
『とどめはお前が刺したからな、守れたんだ、お前が』
『また心を読まれた!?!』
『その顔でよく言う』

（三人称視点）

『紅椿の稼働率は四二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？』
空間投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む
子供のように。天使のように
月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない
いつだって退屈そうな顔の、篠ノ之東その人だった

『んー・・・ん、ん』

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第二形態の戦闘映像が流れていた
それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす

目の前にはただ海が広がり、高さは三〇メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはない
『は。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生がまで可能だなんて、まるで』

『まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な』

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツを着た姿は、闇すべを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた

『やあ、ちーちゃん』

お互いに振りむかない。背を向けたまま、束はさつきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける
どんな顔をしているか、別に見なくてもわかる
そんな確かな信頼が、二人の間にはあった

『ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？』

『……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？』

『びんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのこととはあるね』

かつて『白騎士』と呼ばれた機体はそのコアを残し解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方不明になり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた

『それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよね』

『・・・・・・・・』

千冬は、答えない。しかしそれに構わず束は続ける

『それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでだろうねー。私がしたから、確實あのコアは初期化されたはずなんだけどね』

『不思議なこともあるものだな』

確かにそれについては、わからないというのが本当のところであるそれは、束にとっても同じ

しかし、束は別にわからなくても問題はない

『・・・・・・・・そうだな。私も少したどえ話をしてやるっ』

『へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ』

『例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違えさせ、そこにあるISをその時だけ動けるようにする。ことが出来るとして、そうすると、本来男子が使えないはずのISが使える、ということになるな』

『ん〜？でも、それだと継続的に動かないよねえ』

『そうだな。お前は、そこまで長い間同じことをしないからな』

『えへへ。飽きるからね』

『・・・・・・・・で、どうなんだ？とある天才』

『どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ』

『ふん……。まあいい。次のたとえ話だ』

『多いねえ』

『嬉しいだろうっ？』

違いないね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける

『とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ』

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける

『暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ』

『へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね』

『ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な大事件を自作した、天才がな』

束は答えない。千冬も、もう言葉は続かない

『ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？』

『そこそこにな』

『そうなんだ』

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

『』

その風の中、何かをつぶやいて・・・束は消えた。
忽然と、突然と

『』

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる
その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた

くリョーマ視点く

二人に気づかれぬ場所二人の会話を聞いていた

『やほっ！リッ君』

『東博士』

いきなり目の前に出てきたが予想の範囲だ

『冷たい反応だな』

『あそこで随分シリアスだったのにここではちがうですね』

『人間誰しも変わるもんだよ！リッ君だってそうでしょ？』

『・・・そうですね』

最近では人が何を考えてるか分かってきている
それに

『感情がないリッ君が笑うなんてね』

『同感ですね』

『ねえ、リッ君』

いきなり真剣な顔になった

『リッ君はこの世界楽しい？』

『勿論、仲間が妹がいますから』

『そうなんだ・・・ねえリッ君』

『なんでしよう・・・一緒に雲隠れしようなんて言わせませんよ』

『・・・そう・・・』

沈黙が流れた

『ねえリツ君、リツ君は完璧？それとも天才？』

『何を当たり前なことを・・・天才ですよ』

『どうして？』

『完璧な人とはどんな人を指しますか？全ての分野で天才で感情と味覚がない人ですか？全ての分野で天才で他人に一切の興味がない人ですか？それとも欠陥が一つもない人のことですか？』

『多分、三番だろうね』

『なら、そんな人はいません、人間という限られた器には限度がある、俺から感情と味覚が失われたように、あなたの他人に興味を持てないように』

『そうか・・・そうだよね』

『あなたらしくない』

『ふふっ、そうだね』

東博士は俯いていた顔をあげた、その顔はいつもの顔だった

『じゃあね、私が認めた天才リツ君』

東博士が顔を近づけてきたが俺はひらりとかわした

『何でかわすのさ！』

『さあ、条件反射ですかね』

東博士は頬を膨らませていた

『ふふっ、やっぱりリツ君だね』

それだけ言うと森に消えていった

『ふっ天才か、東さんは天災だ』

向こうでなにやら騒がしいな

・・・一夏が箒をお姫様抱っこで逃げていた

『あつ、リヨーマー！！助けてくれ！』

『ふふっ、はははは一夏』

『げっ！リヨーマーが黒い！笑ってるから前より怖い！』

『一夏私を抱っこしてるからだろ』

おれはオルカーンを展開する

『ちよっ！リヨーマー！マジストップ』

『自業自得、死ね一夏、ラウラという嫁がいながら』

『リヨーマーが冗談言った！嫁じゃないのに嫁って言った』

『一夏！テンションがおかしいぞ！しっかりしろ』

ふふっ、はははははは。楽しいな感情はやっぱり

他の感情もそのうち出てくるかも知れんな

舞う「黒」 甦る「白」(後書き)

とこんな感じですよ

一夏の出番が少ないって？

はいそうです、すみません

有り難うございました

リヨーマが過ごす夏休み初日（前書き）

今回さらに書き方を変えます

緑を纏うものと同じ書き方にします

それではどうぞ

リヨーマが過ごす夏休み初日

朝五時・・・ピツタリに起床

「一夏は・・・まだ寝てるな」

それを確認して着替えを始める

ISスーツをきて腕立て、腹筋、背筋をいつもより多く500回する
今日から夏休みである

なので回数を増やしても何の問題もない

「497、498、499・・・500」

終了、ストレッチをして筋肉をほぐす

さて・・・走るとするか・・・

「あゝ、暑い」

何でこんなに暑いのだよ！まったく

今、朝九時・・・私、鈴は廊下を歩いていた

しっかし、なんでこんなに暑いかな！温度計見たら三十九度って！

ばっかじゃないの！

干からびて死んだらどーすんのよ

窓からグラウンドが見えた

「こんな暑いのに体動かすバカは・・・い・・・た」

なんで・・・リヨーマがグラウンドを全力疾走してんの・・・？

てか、速！！えっ、あのグラウンド一周五キロだよね！？
携帯を出してタイムを計る……

「一周……一分？」

速すぎ……しかも前ラウラの日記を読ませてもらったときたしか
八時まで走っていたはずだけど……今九時だし……五時半から
走ってるとして

210週？……210×5……1050キロ？

てか、まだ走ってる……見てるこっちが暑いわよ
やれやれ……体力バカは……

「……ふう、これでいいだろう」

時間は……十一時か

「ずっと走っていたから五時半から十一時までの五時間半……3
30×5で……1650か

まあいい感じだな、汗も少しかいたし

「あきれた……さっきまで走ってたの？」

「鈴か……悪いか？走って」

「いや……走るのはいいけど……走り過ぎでしょ」

「身体を動かしてないとあまり落ち着かない性分だな」

「……あつそう……てかさ、暑くないの？」

「……まったく」

「羨ましいわね、暑くないなんて」

「寒さも感じたことないな」

「あんだホントに人間？」

「当たり前だ、ただ、遺伝子はいじくられてるがな」

「あっ・・・ごめん」

「気にする必要はない」

「・・・あんたはさ、自分がふっーじゃないってことを悩んだことは無いの？」

「普通な人などいない、お前は候補生という立場にいるだろ」

「そうね・・・そうよね」

「・・・お前は何しに来た、ただ話に来ただけか」

ちなみに今はストレッチをしている

鈴は若干ぽかーんとしている

「悪い？暇なの？」

「なるほど、なら調理室で今研究中の冷えているのに美味しいカレーを作ってやるうか」

「なにそれ？美味しいの？」

「味は知らん、だが、ひんやりはしている」

「味は知らんて・・・」

何か不安と鈴は小さくつぶやいていたが

「で、食うのか、食わないのか」

「食うわよ、味見してやるうじゃんの」

移動中

「てゆうか、リヨーマ、あんだ料理部なの？」

「そうだ」

「初めて知ったわよ、味覚がないのになんで料理部入ったの？」

俺に味覚がないということとはみんなが知っている
その時一夏が、だからセシリアの料理大丈夫だったのかと小声でつぶやいていたな

「料理は作っていて飽きないからな、それに料理なら女子、男子あまり関係ないからな」

「あっそうね、運動部はマネージャーしかできないしね」

何て話をしていると調理室についた

「あっ、部長！」

女子の一言で、調理室にいた女子が一齐にこっちを向く

「課題、すすんでるか」

「進んでる人とそうでない人がいます」

「そうか、世の中にはアイデアがたくさんある、今日は外でもでて、発見して来い」

「」「」「はい！」「」「」

鈴は完全に呆けている

「おい、鈴、大丈夫か」

「・・・は！」

俺は、冷やしカレーの準備を始めた

「リョーマ、あんた・・・部長だったの？」

「ああ、前部長は俺と料理バトルをするのよ！」なんて言ってきた

だから料理作って食べさせたら「なあー！ー」と言って部長を勝手に俺にせずと部屋にこもって料理作ってるらしい」

「へえ」

鈴は料理器具をいろいろ手に持ちながら俺がカレーを完成させるのを待っていた

「ねえ、レシピってあるの？」

「ああ、作るときは必ずレシピを作るようにいつてるんだ」

俺はそう言っただけで鈴にレシピを見せた

「へー、ほんとに美味しいの？これ」

「だから知らん、これで、完成したんだがな、味が分からないから」

「そっか、課題がどうか、言っただけだ」

「ああ、夏の暑さに負けるなIS学園、暑い時は冷めたもので乗り切ろう！と前部長が」

「へーと鈴は一言つぶやく」

「できたぞ」

「おお、おいしそうね」

見た目は完全にカレーである・・・が

「湯気が出てない、ほんとに冷えてるのね」

「もちろんだ、カレーにした理由は意外性が欲しかったからだが」

「ふむ・・・」

鈴はカレーを一口

「・・・おいしい」

「ほんとか」

「うん、カレーの常識を綺麗に覆したわね」

「そうか、なら俺の課題はクリアだな」

調理室を出て俺は鈴と別れた

暇だな・・・今は午後一時・・・走るか

「でね、一夏。リヨーマが冷えたカレーをね」

「へへ、あそこで走ってるリヨーマがねえ」

「そうそう、あのグラウンドで朝と変わらず走っている・・・リヨーマが」

な・・・リヨーマ、・・・なんでまた走ってるのよ
もう五時だったのに

「おおーい、リヨーマ!」

一夏がリヨーマをよんだ

「ふむ、いい汗かいたな・・・で、何の用だ」

「リヨーマ! あんたなんでまた走ってるのよ、暑苦しい!」

「暇だったんだから仕方がないだろ」

「冷えたカレーがあるんだってな」

・・・240x5・・・1200キロだな

「ああ、作ったがどうした」

「今度作ってくれよ」

「別にかまわんぞ」

今日一日で・・・1200+1650・・・2850キロ、普通の人が走れる距離ではないな

「あなたは夏休みをなんだと思ってるの？」

「・・・思いつきり身体を動かせる日か・・・」

「・・・そう・・・」

ちなみに、物陰でラウラが日記を書いていたことに気が付いたのは・・・誰もいないんじゃない？

リヨーマが過ごす夏休み初日（後書き）

こんな感じですよ

ありがとうございました

ウォーターワールドの惨劇(前書き)

今回は原作で鈴たちが暴れたウォーターワールドのお話です
まあ犠牲者は鈴たちだけど
どつぞど

ウォーターワールドの惨劇

グランド)

ふう、今日は張り切って五キロを三十秒で走ってしまったな
五時半から初めて今十時半・・・300分×2・・・600×5・・・
・3000キロだな
さすがに汗の量が多いな
気分転換にプールにでも行くか

一時間半前)

「一夏、ここいかない？」
「ウォーターワールド？」
「あんた知らないの？最近できたばかりでこの前売り買うのにも
二時間くらい並ばなきゃいけないほどなんだから」
「へへ、でいつ行くの？」
「じゃあねへ、十時にゲート前つてのは？」
「おう、分かった」

と一人抜け駆けをしている子猫・・・まな板鈴音がいた

「誰がまな板よ!!」
「うわっ、いきなり大声出すなよ」
「ああ、ごめん、何か空から変な声が聞こえたから」
「俺なんも聞こえなかったけど」
「あんたの耳が悪いのよ」
「ひどっ!!」

「十時にゲート前よ、ちゃんと来なさいよ」
「分かってるよ」

原作を知ってる人ならお分かりだろう

彼は来ない

セシリアの話しはカット

「なんであんたと行かなきゃなんないのよ!」

「それは私だつて同じですわ!なぜあなたと・・・」

「一夏^{さん}後で覚えておきなさい」「

南無南無

ウォーターワールド

ふう、やはり夏はプールや海に入るのがいいと言うのはほんとだな
小さい頃から戦闘訓練と紛争介入しかしてなかったからこういう楽
しみ方は知らなかったからな
さてそろそろ帰るとするか

『では、本日のメインイベント! 水上ペアタッグ障害物レースは
午後一時より開始いたします! 参加を希望する方は十二時までに
フロントへとお届けください!』

そんなことをやるのか・・・どれ、見ておこうかな

『では、本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！ 参加を希望する方は十二時までにフロントへとお届けください！』

『優勝したペアはなんと！ 沖縄五泊六日の旅にご招待！』

.....

「セシリア」

「鈴さん」

私たちは互いを見合い、うなずき

「「これに出るわよ（でましよう）」

ここに第一回大会にして歴代最強のコンビが結成されるのだった

「それでは！ 第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんが開始の宣言をしながら大きくジャンプした。着ている水着が大胆なビキニということもあってか、会場から歓声と拍手が巻き起こる。参加者は全員女性、観客のテンションも大いにかつていることだろう

・・・なんであそこに鈴とセシリアがいるのだろう

「では皆さん！ 参加者に今一度大きな拍手を！！」

再び響く拍手。レース参加者は手を上げたりお辞儀をしたりと何らかの反応を示しているが、その中で一切の反応を示していないペアが一組。黙々と柔軟運動をしている

「……」

念入りすぎだろ、あの二人

「優勝賞品は沖縄五泊六日の旅！ 皆さん、奮ってゴールを目指してください！」

この賞品がそんなに欲しいか、そんなに一夏と行きたいのか
なんでもこのレースは妨害ありらしい、あの二人・・・おそろしい
ことしないだろうな

「いよいよレース開始です！ 位置について、よーい・・・」

パンツ！ と景気のいい競技用ピストルの音が響き、参加者二十四名十二組が一斉に駆けだした

鈴音とセシリアはリアットを仕掛けてきた妨害ペアを余裕で避け、プールに叩き落とす際に水着を奪っていた。しかも、奪い取った水着は妨害ペアが落ちた反対側の観客席に丸めて放り込むなど陰険なことこの上ない

「トップの木崎・岸本ペアはご存じ先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！」

なんでそんなのがここにいるんだろうか

鈴たちは妨害を仕掛けてきたペアを相手にしてきたから体力は結構減ってるはず

勝機は薄いか

「こうなりや奥の手よ！ セシリア！」

「何ですの！？」

「突っ込んで！」

「わ、私がですか！？」

「速く！！！」

鈴に必勝の策があると信じ、単身セシリアはアマゾネスペアに呐喊した

「そこで反転！」

「え？」

戸惑いながら、セシリアは振り向く。振り返った瞬間に視界に入ったのは鈴の・・・足の裏

「ぶべえっ！！！」

女の子なら一生上げたくないであろう声を上げ、セシリアは思いっ切り、思いっ切り顔を踏まれた

「むごい」

セシリアの顔を踏み台にして鈴は一気に跳躍、ゴールに飛び付いてフラッグを獲得した。鈴音とは対照的に、セシリアはアマゾネス二人のタックルを受けて数メートル下のプールへと落下、数メートル級の水柱を上げる

「ありがとう、あんたの御陰よセシリア。あんたのことは一生忘れ

ない……」

いや、セシリア死んで無いだろ

耳がいいので騒ぐ観客の大声のでも鈴が何を言ってるのか聞こえた

「ふ、ふ、ふ、ふふふふ……」

地獄の底から響くかの如く笑い声。プールからさっきの数倍の大きさの水柱が出来上がった

「私の、私の顔を足で。今日という今日は許しませんわ鈴さん!!」

ブルー・ティアーズを展開し、セシリアは憤怒の表情を浮かべて鈴に肉薄する。対する鈴もくるくる手の中で回していたフラッグを投げ捨て、甲龍を展開させて臨戦態勢に入った。

「なななあっ!?! 何と、二人はIS学園の生徒のようです! まさかこの大会で二機のISを見れるとは思っていませんでした! . . . あれ、でも、ルールのにはどうなのでしょう……?」

もう鈴がフラッグとってるから大会終了だろ

俺は司会の人に近づくと

「あれ?何ですか?」

「いえ、観客の非難をしないんですか?」

「……そんなにひどくなる?」

「あの二人なら」

司会の人はいく秒間悩み

「みなさん！危険ですので早く非難してください」

観客全員ものすごい速さでいなくなった
さてと

「今日という今日こそは！！」

「ふん、あんたなんかには負けないから！！」

私はスターライトMK？を鈴さんに構えるその瞬間
スターライトMK？が少し重くなった

「なんですか？」

「……………」

「うそ……………」

そこには、阿修羅のようなオーラが出ているリョーマさんがスター
ライトMK？の銃身の先端に立っていました
その姿を見た瞬間私たちは

「（ああ……………しんだな）」

生身のリョーマさんにISの私たちは手も足も出ずに水中に沈めら
れました

「……………すいませんでした……………」

「リョーマ君は被害を押し返してくれたんだから謝らなくていいのよ、
でもその二人……………」

「……………はい……………」

「こつ言ったことは金輪際しないでくださいね!…」
「はい」

まったく

「こつ」

「自業自得だバカ者ども」

「こつ」

結局賞品はもらえなかったようだ

ちなみに今回もこつそりと追跡していたラウラがいたそう

ドイツ人が踊る夏祭り（前書き）

今回は筭たち達の夏祭りにリョーマが言った時のお話です
どうぞ

ドイツ人が踊る夏祭り

（寮内）

なになに、篠ノ之神社にて夏祭りか
篠ノ之家伝統の踊りもあるか
面白そうだな

「ラウラも誘って行ってみるか」

「篠ノ之神社で夏祭りですか？」

「ああ、どうだ」

「いきます！もちろん！」

「なら、夕方の六時にゲートで」

「わかりました、兄上」

兄上が祭りに誘ってくれるとは！

「ねえラウラ」

「どうしたのだ？シャルロット」

「服どうするの？」

「もちろん、制服だが？」

「お祭り行くのにいいの？」

「そもそもこれしか服は無いぞ」

「でも、リョーマが私服着てきたらどうするの？」

「ぬっ」

それは考えてなかった

「なら、いい考えがあるよ」

シャルロットの顔は素晴らしいほど輝いていた

「神楽舞を？」

「駄目ですか」

「うん、一日で覚えられるものでもないし」

「覚えようと思えば覚えられると」

そもそも、男が踊るの駄目とは言わないのだな

「でも、箒ちゃんもいることだし」

「メインは箒ですから、終わってからの余興のようなものでいいですから」

「なら、やってみる？」

随分あっさりと了解するんだな

「箒ちゃん、久しぶり」

「お久しぶりです、雪子さん」

「見ない間に随分きれいになったわね」

「雪子さんも相変わらず綺麗ですよ」

久しぶりにここに帰ってきた

篠ノ之神社、私の・・・私たちの家

私たちがいなくなってからは叔母の雪子さんが神社や家を掃除してくれている

「それじゃあ、動きの確認しようか？」

「はい、お願いします」

いつも練習はしてたから、問題なく踊れた

あとは本番で緊張さえしなければ

・・・一夏は来ないだろう、言っていないから

「兄上！遅くなりました」

「いや、俺もちょうど来たところだ」

「では、行きましょう！」

「そうだな、しかしラウラ」

「なんででしょう？」

シャルロットめ、まさか、祭りだからと言って浴衣を着せるとは！

動きずらくて集合時間に遅れてしまったではないか

しかし、兄上も黒い男性用の浴衣を着ていた、銀髪に黒はやはり相性がいい

私の浴衣も黒一色である

なぜシャルロットはこれを持っていたのだろうか？

そう言えば、兄上の感想をまだ聞いていないが

「なかなか似合ってるな」

「ホントですか！」

やったぞ！兄上に褒めてもらった！

「よし、いくぞ」

「はい！！」

「懐かしいな、篠ノ之神社」

ここに来たのは、箒たちがいなくなっただけくらいか
ホントにいらなくなっただけで泣いたんだっただけな
さて、神楽舞まで時間あるから少し見て回ろうつと

「ここが箒の実家ですか？兄上」

「ああ、そうだ」

ふむ、調べたとおりなかなか趣のある作りになっているな
神社の前の道路は出店で埋まっている
ラウラは初めての出店に目を輝かせていた

「箒が神楽舞を踊るまで時間がある、少し見るか」

「はい！兄上」

あとで雪子さんのところに行っておかないとな
出店を見ているといよいよ神楽舞が始まる時間になった

「ん、一夏」

「え？おお、リョーマとラウラ」

「む、一夏（嫁）ではないか、一人か」

「ああそうなんだ」

「だったら私を誘えばよかったではないか」

「他の奴らは」

「みんなには言っていないんだ」

一人で来たかつたらしい

まあ、他の奴らは騒ぐだらうし

鈴とかセシリアとか、一夏がらみで

「はじまるな」

「お、そうだな」

「随分嬉しそうだな！」

「ナイフをしまえ、どこに持ってた」

「あ、いえ、非常用に」

と言って袖にナイフをしまっていた

箒の舞は女性独特のしなやかさを使った綺麗な舞だった

刀と扇を巧みに使い流れるように踊っていた

あれに比べたら俺の踊りは見劣りするだろう

なんせ一日訓練に昔から踊っていたわけではないから

一夏は隣で箒に見惚れ、ラウラにつねられていた

そうしている間に神楽舞が終わった

「じゃ、またあとで」

「一緒に行かないのか一夏（嫁）」

「兄妹の邪魔したくないから」

その心遣いありがたいが、それをいつも発揮していれば少しはマシになるのだがな

俺たちはそのあとさらに出店を回った

トントン

「ん、雪子さん」

「そろそろ出番よ」

「ああ、そうですね、分かりました」

「兄上？」

「舞台を見ているラウラ」

「随分可愛い妹さんね？」

「自慢ですから」

「ふふっ、その抑揚のない声だと自慢しているようにには聞こえないわね」

「生まれつきなのでどうしようにも」

「これ、衣装」

「どうも、すみませんねいきなりでこんなこと」

「ううん、いいのよ」

衣装は神主の服だった

「うん？」

「まだだれか踊るのか？」

「いや、そんな予定はなかったが」

俺は途中で箒と遭遇して今一緒に出店を回っていたところだ
本来は箒だけ踊る予定らしかったのだがいま、誰か踊るらしい

「雪子さんか？」

「そうかもしれない、しかしそれなら言ってくれてもいいのに」

そして舞台上上がった人物を見て驚愕した

「「リョーマ!」!」

なぜ？しかもリョーマはいま神主の格好をして左手に扇、右手に刀を持っている

他の客も驚いてるなか踊りが始まった

幕とは違った力強くそれでいて流れるような動き

同じ舞でも男と女でこうも印象が変わると思ってたなかった

しかも髪の毛を後ろだけ出してその銀髪が光に当たって何とも幻想的な雰囲気が出ていた

踊りの最後に刀の切っ先に開いた扇を乗っけるといいう大技を披露してリョーマは舞台を降りて行った

「ホントにすごい踊りだったわ！幕ちゃんと同じくらいよ」

「ありがとうございます、いい体験でした」

俺は衣装を返し浴衣に着替えラウラの元へ戻った

「ラウラ」

「あ、兄上！とても素晴らしかったです」

「そうか、ありがとう」

俺はラウラの頭を撫でた

「~~~~~／／／」

「さて、行くか」

俺はラウラの手を組み歩き出した

今日はなかなかいい日だった

向こうで一夏達がいい雰囲気になってたが無視した

ドイツ人が踊る夏祭り（後書き）

「……」
「いきなりだんまりはよくないよりヨーマ」
「何の用だ、作者……狂雲」
「今回から時々こんなやろうと思ってだな」
「もう一本でもやってるだろ」
「ぐさっ！」

「さていきなりだが俺の名前の由来の本当の意味を教えろ」
「……自分の名前を入れたかっです」
「なに」

「初めての小説だったから自分の名前を入れたかったんだよ……！」
「……そんな理由か」
「わるいか……！」
「別に」

「普段いっつも二次創作を頭の中で描いて遊んでいましてね」
「……」
「それでいっつも主人公を自分にしてまして」
「……」

「そんな時これ見つけましてね」
「それでこのストーリーで遊んでた時に」
「これ書いたら面白いかもって」
「それでドイツ語でIS名とか武器の名前探して」
「それで始めたのがこれですよ」
「なるほど」

「もつと喋れよ……！」
「貴様に喋る話など皆無と言ってもいい」
「……Orz」

「もう一本の奴で自分の名前を入れればよかったのではないか」

「最初はこれだけ書くつもりだったから」

「それにドイツ人っぽい名前なんてでてこねえ」

「愚痴はその辺で辞めろ」

「すいません、ダメ作者で」

「それはまた来週」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119w/>

IS 天才以上完璧未満

2011年11月19日17時50分発行